
東方異譚

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方異譚

【Nコード】

N08760

【作者名】

睦月

【あらすじ】

10年前、まだ幼かった博麗神社の巫女の前に現れた一人の少女。

「幻想郷は全てを受け入れるわ」

幻想郷の管理者である妖怪の賢者が少女を受け入れた時、その物語は始まった。

少女が描いた未来と願った未来。

少女は果たしてどちらの未来に導かれるのか？

「私は…私の存在意義に懸けて、全力で壊します。この楽園を。私が壊すか、私が壊れるか、どちらが先ですかね？」

プロローグ（前書き）

この小説は「上海アリス幻樂団」様の弾幕シューティングゲーム「東方project」シリーズの二次創作となります。

独自解釈、キャラ崩壊、原作との相違が多数なので御注意を。

それから…ものすごく厨二臭いです（あらすじからしてぶんぶん）。
そういったのが大丈夫という方は、先に進んでください。

そういったのがダメな方、先に進んで不快な気分陥っても責任は一切取りませんので悪しからず。

プロローグ

壊すことには慣れていた。

だけど、壊す度に感じる心の痛みには、いつまで経っても慣れそうにない。

慣れたいとも思わないけれど、慣れなくては駄目なのだろう。それが私なのだから。

壊すことが、私の存在意義なのだから。

「幻想卿は、全てを受け入れるわ」

彼女は言った。

その後「それはとても、残酷なこと」とも言っていた。
本当に、その通りだと思う。

いつそのこと拒絶してくれたら、どれだけ楽だっただろう。

…ま、なんだって良いんだけどね。

受け入れられてしまったのなら、仕方がない。私は私の存在理由に基づいて動くだけ。

全力で、壊す。

私は私にとっても楽園であること、「幻想卿」を壊す。

…それでも思ってしまう。

ここに、いつまでもいられたら、と。

そんな都合のいいこと、あるわけないのに。
だから願う。

せめて、私が幻想^ニ卿を壊す前に、私自信が壊れますように、と。

第1話 パンドラの箱

「待ってください！それはまだパチュリー様も読んでないのにつ」

「借りるだけだぜ。私が死んだら返すって言ってるだろ」

「ダメですつてばー！」

「うるさいなあ。ほれ『マスパ』」

「アッー……」

ぴちゅーん

「……話には聞いてたけど……いつもあんな感じなのかしら？」

レミリア・スカーレットが、机越しに対面する少女 パチュリー・ノーレッジに尋ねた。声にはどこか呆れが含まれている。

「「あんな感じ」って？」

「文脈で理解できない？あれよ、あ・れ」

レミリアが指した先では、小悪魔がうつ伏せで倒れていた。

所々、服が焦げており、よく見るとプスプスと煙が上がっている。

パチュリーは読んでいた本から目を離し、レミリアの指した方を見る。

そして視線をまた読んでいた本に戻した。

「そうね、あの白黒が来たときは大抵ああなるわ」

「何とかしなさいよ」

「門番がしっかりしてくれば一発で解決するのだけれど」

「図書館の管理者はあなたよ、パチエ。門番にも問題はあるけど、図書館の管理を怠るのはまた別問題じゃない？」

「……ところで今日は何しに来たの？」

「（あ、話逸らした）」

この館の当主なのだから当然この図書館も彼女の物である。そしてパチュリーはこの図書館の管理と引き換えにこの館「紅魔館」に居

候しているのだ。故にパチュリーはこの手の話題だと非常に不利である。

もつとも、レミリア自身この図書館を放置している。

そのためだけこの図書館にある本が盗られたとしても気にしないし、また本が盗られていることに関してパチュリーを咎めるつもりもない。

ここは素直に彼女の話題変換に乗ってあげた。

「ここ最近あなたの姿を見てなかったから、生きてるかどうかの確認よ」

「咲夜に聞けばいいじゃない。毎日ご飯を私のところに運んでるのは彼女なんだから」

「そこは直接、自分の目で確認したいじゃない？」

「なにそれ」

「べ、別に会いたかった訳じゃないんだからね!!」

「そこで何故ツンデレ？」

「流れるに？」

「革新的な流れね。だけど自分で言うっておきながら疑問符が付くのはどうかと思うわ」

「細けえこたあいんだよ!」

「…レミイ、最近何か新しいマンガでも読んだ？」

「最近は読んでないわ。今のセリフとか、フランが言っていたのを真似てみたのよ。あの子、最近マンガを読み漁ってるみたいだし」

「へえ、そうなの。まあ、マンガだとしても本を読むのは良いことね」

「他にも「すごく…大きいです…」とか言ってたわ」

「妹様の未来を思うのなら読ませる本を厳選するべきね」

親友の妹が開けてはいけない扉を開けようとしているのを感じたパチュリーは忠告する。

レミリアは苦笑しながらも素直に頷いた。…忠告するということは妹の言っていたセリフの元ネタを、彼女は知っているのだろうか？

という疑問は心の奥に閉まっておく。

パチュリーならばその手の世界に足を踏み入れていても、おかしくないと思ったから。

「今ものすごく失礼なことを考えなかった？」

「気のせいよ。咲夜、紅茶のおかわり」

「畏まりました」

パチュリーの鋭い質問を軽くいなして傍らに立つ従者、十六夜咲夜に紅茶のおかわりを注文する。

質問をいなされたパチュリーはじと目でレミリアを見ていたが、やがて溜め息を吐き、「私のもお願いするわ」と咲夜に紅茶を催促した後、再び視線を手元の本に戻した。

その時、先程まで倒れていた小悪魔がむくりと起き上がり、ふらふらとした足取りでパチュリーの所にやって来た。

「ううゝ…。申し訳ございません、パチュリー様。また今日も本を盗られてしまいました…」

「今日は何冊持ってかれたの？」

「6冊です」

「いつもより少ないわね」

「頑張りました」

とはいえ、本を盗られている事に変わりはない。小悪魔もそれがわかっていいのか、「頑張りました」とは言ったものの、あまり誇らしげな様子でもない。

「（これはそろそろ、本格的に対策を練った方が良いわね…）」

先程レミリアに図書館の管理について注意されたばかりである。レミリア自身はあまり気にしていないかも知れないが、彼女の善意でこの図書館の管理と引き換えに居候させてもらっているのだから、このまま何もせずにいられるほど、パチュリーの面の皮は厚くない。「…あなたは魔理沙と戦^やり合って散らかった所を片付けたら今日はもう休みなさい」

「わかりました…」

小悪魔はペコリとお辞儀をしてから、弾幕ごっこ（とは言っても一方的にぴちゅられたのだが）で散らかった所へと向かっていった。ふらふらと歩いていく小悪魔の背中を見届けながら、レミリアは新しく淹れてもらった紅茶に口を付ける。

長い付き合いだ。パチュリーが今、何を考えているのか手に取るように解る。変なところで真面目なのだ、この紫もやしは。

「…注意した私が言うのもおかしいんだけど、程々にしておきなさいよ？寝ずに対策を練ってそのままぶっ倒れたりとかしたら本末転倒もいいところだわ。ただでさえ病弱なんだから」

「善処するわ。図書館の管理はともかく体調の管理に関しては保証できないけど」

「誰が上手いことを言えと」

「与えられた玩具は大事にするものよ。善意で貰ったものなら尚更ね。それが「モラル」ってものでしょ？」

「私たち人外にそんなモラルが当てはまるのかどうか疑問だけどね」
「同感。けどモラルもプライドも無い生き物なんて、それはただのケダモノだわ」

「同感ね」

気高き吸血鬼の少女は、目の前の親友である魔女に微笑んだ。その笑顔を見て、パチュリーは「やはりこの子は吸血鬼なんだな」と、改めて思う。少女の従者である咲夜や役に立たない門番も、この笑みにある独特の魅力に惹かれたのかも知れない。そしてパチュリー自身も、その笑顔に惹かれた一人である。

パチュリーは読んでいた本を閉じ、隣の誰も座っていない椅子の上に置く。本当は今日中に読んでしまいたかった本だけど、久し振りにこの友人と色々話したくなったのだ。たまにはこういうのも良いだろう。

「あら、読書はもう終わり？」

「目が疲れてきたのよ」

「こんな暗いところで読むからよ。ランプでも置いたら？」

「止めとくわ。前に置いてあったランプ、小悪魔が倒して危うく本が燃えるところだったのよ」

「それなんてドジッ娘？」

そのテンプレどこで覚えたのよ？と思いながらも口にせず、咲夜の淹れた紅茶を飲む。丁度いい温度だった。

「それにしても…」

レミリアが、小悪魔の歩いていった方を見ながら呟いた。

「あの小悪魔、丈夫よね。あの白黒の『マスタースパーク』が直撃してるのに、すぐに起き上がって歩いてるんだから」

「その頑丈さがまったく防衛に役立つてないけどね。まあ、本の整理とかやってくれるから、そういう面では助かってるけど」

「…あなたも召喚するなら、頑丈なだけじゃなくてちゃんと戦える悪魔を召喚すればよかったのに」

パチュリーが怪訝な表情を浮かべた。その表情に、レミリアは逆に怪訝な表情を浮かべる。

「どうしたの？」

「…レミィ、あの子を…小悪魔を召喚したのは私じゃないわよ？」

「へ？」

思いもよらない友人の言葉に、思わず間抜けな声をあげるレミリア。パチュリーは更に続けた。

「私は5年前にここ…図書館に住み始めた時には既に小悪魔はこの図書館の司書としてこの図書館を管理してたのよ？てつきりレミィが私に来る前に雇ってたのかと思ってたんだけど」

「私は雇ってないわよ。そもそもあなたが来るまで私は図書館（こゝろ）の存在を知らなかったくらいだし。」

咲夜なら知ってたかも知れないけど…」

「いえ、私も図書館の事は存じ上げておりません。ここの扉が魔法で施錠されていたので、中に入れなかったのですよ」

「…そういえばそうだったわ。ここの扉、魔法で何重にもロックされてて、開錠するのにすごく骨が折れた記憶があるわ」

「それじゃあ…パチエが来るまで、この図書館はずっと「開かずの間」だったってこと…？」

「…そういうことになるわね…」

「……だとしたら…」

レミリアの目付きが鋭くなった。

「あの子はいつたい、何者なのかしらね？」

3人の間に、重苦しい空気が広がる。

レミリアがこの幻想郷に移り住んだのは10年前。

とある事件から情緒不安定のために幽閉していたフランドールを、この幻想郷ならば自由に放しても大丈夫と思い、外の世界から来たのである。

その時に無人の廃墟と化していたこの紅魔館を咲夜を含むメイド達に掃除させ、住み処にした。咲夜の話によるとその大掃除の時にこの図書館に気付き、既に扉は施錠されていたという。つまり、この時点では図書館の中には入れなかったため、扉の奥が図書館であることは誰も知らない。

そして紅魔館に移住してから約5年後にレミリアは外の世界で既に友人関係だった幻想入りしたばかりのパチュリーを紅魔館に呼び、ここに住むことになった。

この図書館はパチュリーが魔術で施錠された扉に興味を持ち、勝手に開けたことでその存在が明るみになったらしい。

パチュリーの話が確かならば、その時には既に小悪魔は図書館に存在していたということになる。

小悪魔がどこから来て、いつからこの館にいるのか、誰も知らない。

「……咲夜、小悪魔を探してここに連れてきなさい」

「承知しました」

レミリアの命に咲夜はお辞儀をして返すと、次の瞬間にはいなくなっていた。

パチュリーは目を細め、レミリアを見据える。

「…小悪魔、どうするつもり？」

「そう睨まないでちょうだい。今更追い出したりしないわよ」
パチュリー、目を丸くして瞬きを一つ。

「…だったらどうしてわざわざ咲夜に呼びに行かせたのよ」

「さすがに素性を何も知らないまま住まわせる程、私は慣用じゃないのよ。最低限、出生と来歴、それから本名くらいは吐いてもらうわ」

「随分と丸くなったものね」

以前のレミリアであれば、小悪魔を血祭りにしてもおかしくない。

「追い出して欲しかったの？」

「逆よ、追い出して欲しくなかったの。あの子がいないと不便なのよ、色々と」

「ふうん、それだけかしらねえ？」

「どういう意味よ」

「別に他意はないわ。安心なさい、あれだけ長くいたらもう紅魔館の一員よ。今更追い出したりなんかしないわ。害は無いだろうしね」

パチュリーはこれまで、小悪魔をレミリアが雇った図書司書だと思っていたのだ。当然、小悪魔にはかなり隙を見せていたはずである。しかし、小悪魔はパチュリーの寝首を掻こうとしなかった。パチュリーの實力からそれを戸惑わせたのかも知れないが、その事を考慮に入れても信用に足る。

「ありがとう。一応、感謝しとくわ」

「やめてよ、そんな大それたことをした覚えはないわよ」

変なところで真面目な紫もやしの言葉に、レミリアは苦笑を返す。

その笑みに、ほんのちよっぴりの照れを隠して。

カチリと、歯車が一つ噛み合った。

小悪魔は作業の止め、自分の胸に手をおく。

「……嫌な予感がするなあ……」

今日は小悪魔にとって、色々起きては欲しくない偶然が重なっているのだ。

その度に、今のような悪寒を感じる。

「（…気に入らないなあ。ホント、気に入らない）」

思わず舌打ちをしそうになって、代わりに出てきたのは溜め息だった。

再び作業に戻る。

最後の本があるべき場所に置いて、片付けが終わった。

腕の上に挙げ、伸びをする。体内時計では午前2時を回っていた。

「（今日はもう寝よ。なんだか嫌な予感がする）」

「あら。ここにいたの、小悪魔」

後ろから声が聞こえた。

小悪魔の頬が強張る。

あるはずの無い心臓の動悸が激しくなる。

振り返る。

紅魔館当主の従者 十六夜咲夜がそこにいた。

「片付け終わったのね。お疲れ様、大変だったでしょ」

「いえ、半分自業自得ですし……」

「そんな訳ないでしょう。あの本みりんが居眠りなんかせずになんと門番してれば少しは私達も楽になるのに……刺すナイフを増やす必要がありますよね……」

何やら物騒な顔で物騒なことを呟いているが、今の小悪魔にそれを聞くほどの余裕はなかった。

単刀直入に尋ねる。

「それで、何かご用ですか？」

「私よりはお嬢様とパチユリー様があなたを読んでのよ。聞いた

いことがあるらしいわよ?」

「...「聞きたいこと」「...ですか?」

...この時、私はどうしてこんなことを聞いたんだろう。

「ええ、お嬢様とパチュリー様が話してて、その時にあなたの事が話題に上がってね」

わかってた。

心のどこかではわかってた。

だけど、それを認めたくなくて。

それでも.....

「それで あなたの素性が気になったのよ」

結局、結果は変わらなかった。
ホントに、気に入らない。

「疲れてるところ悪いけど、少し付き合ってもらおうよ」

歯車が全部噛み合った。

第2話 反旗の色は何色ですか？

レミリアが3杯目の紅茶を自分で淹れている時、咲夜が2人の元に戻ってきた。彼女の後ろから小悪魔が付いてくる。

パチュリーが空になったティーカップをソーサーに置いた。

「仕事が終わったばかりで疲れてるところ悪いわね。時間はあまり取らないわ。ただ幾つか、私達の質問に答えて欲しいんだけど」

小悪魔はパチュリーを一瞥し、すぐに視線を彼女から虚空へと移した。テーブル越しに向かい合うレミリアとパチュリーの中央。

そんな小悪魔にパチュリーは多少ムツとなる。

「ちよつと小悪魔？どうしたのよ」

小悪魔は尚も無視して、自分が見つめる先に言い放った。

「……いるの、わかってますよ。いい加減出てきたらどうですか？」

「「？」」

パチュリーと咲夜は何の事かわからなかったが、レミリアは気付いていたらしい。

頬杖をつきながら言い放った。

「だってさ。私にも気付かれてるんだから、早く出てきなさい。色々聞きたいこともあるし」

「あらあら、かくれんぼは得意なのだけれど」

小悪魔とレミリアに呼応して空間が裂ける。

「隙間」と呼ばれる空間から現れたのは隙間妖怪こと八雲紫だった。眠りから覚めたばかりなのか、輝くような長い金髪はあちこち跳ねており、彼女自身欠伸をしている。咲夜とパチュリーが警戒態勢をとるがレミリアは自然体のままだ。

「その様子だとかかなり慌てて来たみたいね。あなたにしては珍しいじゃない」

「まったくですわ。気持ち良く寝ていたところにいきなり「約束を果たすべき時」になるなんて」

「約束？」

「そこのお嬢さんとね。貴女達には「小悪魔」って呼ばれてたっけ。紫はニコニコと笑う小悪魔に視線を向ける。

「約束、覚えてたんですね。私でさえ忘れてたのに」

「ダウト。忘れていたのならこんなことしないでしょ？」

「正解」

レミリア、パチュリー、咲夜を置いて話を進める2人。あまりの急展開についていけない。

「…ちよつと2人とも、話が見えないんだけど。そもそもあなた達、知り合いだったの？」

「10年程前に、私が幻想郷に来たときに知り合ったんです。色々とお世話になりました」

「そう思っているのならこんな恩を仇で返すようなことはしないで欲しいですわ」

「あははは…耳に痛いです」

いつもの胡散臭い笑みを向けられ、小悪魔は苦笑する。

そして、パチュリーに視線を移した。

「…小悪魔？」

「本当は、もう少しいたかったんですけどね」

そう言う小悪魔はスカートの両端を摘んでお辞儀した。

「突然ですけど、これでお別れです。今までありがとうございました。すごく…楽しかったです」

「何を言って」

「パチュエ」

パチュリーの言葉を、レミリアが静止した。

小悪魔を静かに見据える。

「改めてそんなことを言っつてことはそれなりの理由があるのよね？」

「理由でしたら紫様に聞いてください。私はこれから忙しいですから」

「あら」

紫がいつもの胡散臭い笑みではなく、威圧するような笑みを向けてくる。

小悪魔は首を傾げた。

「何か？」

「私がこのまま黙って、貴女を好きにさせると思う？」

「思いませんが今はそうせざるを得ないでしょう」

「どうということかしら」

「ダウト。それがわからないならわざわざここに来たりはしないでしよう？」

「正解よ。仕方ないわね。ほら、さっさと行っちゃいなさい」

「では遠慮なく」

小悪魔はもう一度お辞儀をすると、そこから立ち去る。

彼女の靴音が聞こえなくなった頃、紫は額に手を当てて呟いた。

「本当、不覚だわ。この私が先手を許すなんて」

そう言う紫は、いつもの胡散臭い笑みを浮かべる彼女からは想像できない姿だった。

博麗霊夢は目が覚めた。

辺りは暗く、障子越しに外から月明かりが射し込んでくる。

「…………むう」

身体を起こす。そして枕元に置いてある香霖堂から勝手に持ってきた時計を見る。

2時半だった。

「…………まだ夜中じゃない」

多少苛立ちを込めて呟いた。

里の人からの依頼で悪戯妖精3人をミツコミコにしてやったのか

なり疲れているのだ。

本来ならばまだグッスリと眠っていたところ　　なのだが。

「……」

虫の知らせ。

持ち前の勘の良さがここで発動。彼女の勘が警笛を鳴らす。

また眠る気にはなれなかった。

仕方なく先程まで寝ていた布団から出て寝巻きを脱ぎ、いつもの服に着替える。

時計の横に置いてあったお祓い棒を手に取り、障子を開けた。

暗い夜空、月の光と勘を頼りに、霧雨魔理沙は箒で博麗神社に向かって飛んでいた。

人里から少し離れていることもあって、博麗神社の周辺は静かである。

「お、見えた」

それなりに速く飛んでいたため、着くのは早かった。

鳥居の上を飛び越え、月明かりに照らされた石畳に着地する。

「とーちやくつと……さすがにこんな夜中じゃ霊夢の奴も寝てるかな？」

「起きてるわよ」

「お？」

声のした方を見ると、霊夢がいた。寝巻きではなくいつもの肩を露出した巫女服(?)である。

「何で「(?)」を付けるのよ」

「いや、何言ってるのかわかんないんだが」

「気にしないで。ちょっと神の声に反感を覚えただけだから」

「おいおい仮にも巫女だろ。そんな罰当たりなこと言って良いのか

？」

「仮じゃなくて正真正銘の巫女よ。あんた私のこと何だと思ってるのよ」

「ほう、自分が巫女であるという自覚はちゃんとあるんだな」

大人びた女性の声が響いた。

霊夢でも魔理沙でもない。

2人は空を見上げる。

「ならば今回の異変の解決、博麗の巫女としてきちんと協力して貰おうか」

後光のように輝く九尾が特徴的な妖獣、八雲藍が満天の星空を背景バックにして浮かんでいた。

霊夢は目を細める。

「異変が起きたの？誰よ、起こしたのは」

「紫様からはまだ聞いていないが…まあ、見当は付いている」

藍が、魔理沙を見据えた。

霊夢も藍の視線の先を見る。

「何？異変を起こしたのは、あんたなの？」

「それは違うぜ。私はどちらかというと被害者だ。まあ、結局は私も異変を起こした奴の片棒を担がされてるわけだが」

「その「奴」って誰よ」

「そいつは秘密だぜ」

「…ふうん」

霊夢は溜め息をつき、胸中で「めんどくさいわね」と呟く。

藍がここにいるということとは紫は別の所で動いているのだろう。藍に任せて自分は怠けているということも考えられるが藍自身の口から「紫様からはまだ聞いていない」と話していたところをみると少なくともあのスキマ妖怪は今回の異変に関して何らかの事情を知っているはず。

そしてこの式神も、ある程度の事情は知っているのだろう。今までの彼女の話し方や、魔理沙に目星を付け、尚且つ彼女が博麗神社に

来ることを予想してここに来ていることからそれもそれは確定である。

「（めんどくさいわね。本当にめんどくさい…）」

できれば異変の解決なんて面倒臭いことは他の誰かに任せて起きたいのだが、ここしばらく異変や依頼の類いが無いので生活費が底をついてきているのだ。あの悪戯妖精トリオ退治の報酬だけでは今月末にはもたない。ここはサクッと異変を解決して紫から高値で報酬を払ってもらうことにする。

主犯はまだわかっていないし、どんな異変が起きているのかもわからないが、少なくとも目の前にいるこの白黒が異変の片棒を担いでいるのは本人も口にしていることから明らか。

詳しい事情は後で藍に聞くとして、とりあえず今は目の前にいる魔理沙をぶちのめすことにしよう。

魔理沙はかなりの強敵であり、おまけに今の霊夢の体調は万全とは言えない状態だが負けるつもりはない。

「藍、後で詳しい事情を話さない。とりあえず魔理沙を先に倒しとくわ」

「おっと、今回は物騒なことは無しだぜ。私はお前に別の用事で来たんだから」

「別の用事？」

怪訝な表情の霊夢を余所に魔理沙はスカートのポケットの中から何かを取り出す。

「異変の主催者から「博麗霊夢に渡してくれ」って頼まれてたんだよ」

魔理沙がポケットから取り出したのは赤いリボンだった。それを受け取った霊夢が目を見開いて固まる。

『開戦の合図は赤いリボン。中々に可愛くないですか？』

「…ああ、そういうこと。成る程ね、理解したわ」
「霊夢？」

額に手をやり、俯きながら呟く霊夢に魔理沙は怪訝な表情を向ける。そんな魔理沙を一瞥してから霊夢は横にいる藍に気だるげな視線を向けた。

「あんた、これ知ってたの？」

「知りはずなかつたが予感はしていたよ」

「そう…そうよね」

「色々とわからんところがあるが」

霊夢と藍の会話に魔理沙が割って入る。

「やることはやったし、私はこれで帰らせてもらっぜ。段幕勝負は次に会った時だ」

そう言つて魔理沙は2人に背を向け、数歩進んでから箒に跨がる。

霊夢が呼び止めた。

「魔理沙」

「ん？何だ？」

「あんた、何で異変の片棒を担いでるわけ？」

「…うあー…」

魔理沙がチラッと振り向く。かなりげんなりしていた。

「いやさ、しくじつて異変の主犯者サマに呪いを掛けられたんだよ」

「呪いつてどんな？」

「……」

魔理沙は跨がっていた箒を石畳に横にした後、特徴的なとんがり帽子を脱いだ。

「……それは……」

「……何とも……」

魔理沙の金髪。そこには2対の猫耳が付いていた。

霊夢と藍がかなり微妙な視線を向けてきた。同情や憐れみが混じっているのは気のせいではないだろう。同情や憐れみが混じっ

別にここ幻想郷で獣耳は珍しくない。

藍や彼女の式もそれぞれ狐と猫の耳を持っているし、妖怪の山にすむ哨戒天狗の殆どは狼の耳である。

しかし、それはあくまで人外の話であり…人間である魔理沙の耳が猫耳なのは問題なのだ。

もつとも魔女に猫耳という組み合わせは大きなお友達相手には喜ばれるだろうが当然ながら喜ばせる気は毛頭無い。

「…魔理沙」

「ん？なん…だあっ!？」

戦く魔理沙。

霊夢はお被い棒を持っていない左手を上げ、指をくねくねと動かす。

「あんた…この異変で私が勝ったら…覚えておきなさい？」

「ひいっ」

猫耳魔理沙に刺激され、霊夢の目覚めてはいけない「何か」が目覚める。

鼻息を荒くする霊夢に思わず魔理沙は数歩下がる。

「ままままたまたな！ここ今回はこれで帰るぜっ!！」

これ以上ここに居たくない一心で魔理沙は箒に跨がり猛スピードで夜空を飛んでいった。

魔理沙が飛んでいき姿が見えなくなった時、霊夢は指をくねくねしていた左手を下げる。そして隣に立つ藍に視線を向けた。

「…「これから起こる異変」、私の予想で合ってる？」

「その言い回しが既に証明してる」

「ふうん」

短いやり取り。

しかし今の大きな状況を知るには充分だった。

霊夢は軽く舌打ちをする。

「…てことは何？あいつはこの10年間、何も学習してないわけ？」

「今お前がするべき事はそうやって愚痴を吐くことなのか？」

「うるさいわね。わかってるわよ」

苛立ちも隠さずに言い捨てると霊夢は神社に足を向ける。

「どうせ今やれることは無いんでしょ？だったら今のこの状況、あんたが知ってる限りで良いから話しなさい。お茶ぐらいは出してあげるわ」

「出廻らしか？」

「文句ある？」

「無いよ」

そう言って藍は霊夢の後に続く。

「…ところで」

「ん？」

藍は多少躊躇しながらも聞いた。

「この異変が解決したら…魔理沙に何をするつもりだ？」

ニヤリ

「何をつて…「ナニ」をするに決まってるじゃない」

藍の顔が、見事にひきつる。彼女の九尾は文字通り総毛立っていた。

第3話 心の根の奥の底

黒い革靴が深紅の絨毯を踏んでいく。柔らかな絨毯は靴音を吸収し、辺りには小悪魔の静かな衣擦れの音だけが響く。

長い廊下を抜けホールに出る。そこを横断し、小悪魔の背丈の二倍はありそうな高さの扉の前に立つ。

この扉から、館の外に出れる。

「…よくよく考えたら…」

扉に伸ばした手を止めて、小悪魔は呟いた。

「…私、ここに来てから館の外に出たことないなあ…」

思わず苦笑する。

パチュリーになるべく外の空気を吸うようにと言ったのに、これでは人の事を言えない。それに彼女は異変を解決しに行ったり、レミリアに連れられ宴会にも数回顔を出している。

何だかんだ言ってパチュリーよりも引きこもっている。

「…まあ、なんだって良いんですけどね…」

意味もなく呟いて、頭から余計な思考を排除する。

そして、扉を開けた。

「なん…だと…!？」

門に着いた小悪魔は驚愕した。

鉄格子の巨大な門の前に、門番がいる。

そこまでは普通なのだが…なんと、起きていた。

えっちらほいさと、何やらみよんな動きをしている。あれが太極拳というやつだろうか。

いやそれよりも門番そっちのけで居眠りするのが常な彼女がこんな夜中にしっかりと己の職務をこなしているとは何事か。

「…実は寝ながら太極拳を…」

「起きてますってば。そこまで器用なことできませんよ」

みよんな動きを止めて門番 紅^{ホン} 美鈴^{メイリン}が小悪魔の方を向く。

「貴女が図書館から出るなんて珍しいですね。しかもこんな時間にどうしたんですか？」

「それはこちらの台詞ですよ。いつも居眠りしている貴女がこんな時間に起きてしつかりと門番してるとは何事ですか」

「いつも居眠りしてる訳ではありませんよ」

美鈴は「心外な」と口を尖らせる。

「確かに穏やかな陽射しからくる眠気に負けたり、月の異変の時に月人が浸入してきた時に居眠りしてて通してしまった時もありましたが、割と私はちゃんと門番としての職務を果たしてますよ！」

「先程魔理沙さんが図書館に侵入してきて私をピチュった後、パチユリー様の本を幾つか盗っていきましたが、貴女は何をしていたのですか？」

よく見るとこめかみに青筋を浮かべている小悪魔から目をそらし、明後日の方向を見る美鈴。

「…月がきれいですねー」

「その話題の逸らし方はないと思う」

小悪魔はジト目で美鈴を睨み付ける。

「それと、先程から気になっていたのですが」

「貴女は、どうして「ここ」にいるんですか？」

小悪魔が来たのは紅魔館の方からである。つまり、彼女から見ても美鈴が門の前に立っているということは今、彼女は紅魔館の内側にいるということ。

門番である彼女がいるには不自然な場所である。

「『どうして』と言われましても、貴女を止めるなら外よりも門の内側の方が都合が良いですし」

「…はい？」

何を言ってるのだ、この門番は。

「そもそも何で私を止める必要があるんですか」

「そうした方が良くないかな？」　という「氣」がしまして」

「氣がしたって　」

氣付いた。

そう、以前に咲夜から聞いたことがある。

紅　美鈴　彼女の能力は『氣を操る程度の能力』。彼女がそんな「氣」がしたと言うのであれば、それは予感ではなく確信である。

「…呆れた。貴女の能力って、そんなに汎用性の高いものだったんですか？」

「あら、確かに貴女方の氣配からそれらしい氣は感じましたけど、それだけではありませんよ？」

美鈴はにっこりと笑ってみせる。

「私が「貴女を止める」と言ったときの貴女の嫌そうな表情、そして「氣」。それが決め手です」

いつの間にか鎌を掛けられていた。

小悪魔の顔が若干引きつる。

「好人そんな顔して結構腹芸が得意なんですね」

「それほどでも」

「褒めてません」

「知ってます」

美鈴の表情が、笑顔から一転して真顔になる。

「何が起きているのかは知りませんし、何故止めた方が良いのか、私自身知りません。ですが貴女をここをお通しする訳にはいきません。このまま回れ右をして図書館に戻って下さい」

「何も知らないのなら無責任な事を言わず黙ってここを通して欲しいのですが」

「知ったこつちありませんよ、そんなこと」

小悪魔の刺のある言葉をあつさりと切り捨てる。

「私達妖怪は良くも悪くも身勝手で無責任なんです。だから妖怪である私は無責任に身勝手に、貴女の都合なんて関係なしに今のこの楽しい紅魔館の「気」を壊すようなことはしたくありません」

美鈴が、笑顔のまま小悪魔を見据える。穏やかな笑顔には不釣り合いな威圧感を感じる。

「逆に無責任なのは貴女じゃないんですか？」

「私がですか？」

「そうですね。何度も言いますが私には今、何が起きているのかは知りません。けどパチュリー様が今、不安を感じ戸惑っていることは知っているんですよ。貴女だって、彼女のそういう「気」を感じることはできなくても、彼女がそういう「気持ち」なのは知っているんじゃないですか？」

小悪魔の表情が険しくなる。

対する美鈴は彼女のその表情を見て微笑んだ。

「そういう表情をするってことは、やっぱり気にしてたんですね。今だったらまだ引き返せますよ？」

「笑わせないでください」

小悪魔は皮肉げに笑う。

「何も知らない貴女がボーダーラインを定めるな。黙ってそこを通せ」

「通りたければ通ればいいじゃない、通れるものなら」

美鈴は一蹴する。

腰に右手をあて、小悪魔を見据える。

「言葉のやり取りで貴女をここを通すような安い意地は持っていないの。今のこの平穏を壊すのなら私は力づくで貴女を止めさせてもらう」

「……また無責任な……」

「だから言っただじゃない。良くも悪くも、私達妖怪は身勝手だって」

穏やかに微笑む彼女のその表情の奥には、鋼のような強固な意志が感じ取れた。

小悪魔は嘆息する。

やれやれ…面白くない。

「…よくよく考えたら、ここは幻想郷でしたね。口頭で通してもらおうとしたのがそもその間違いでした」

どこか投げやりな表情で小悪魔は頭を振る。

彼女の発する声は気だるげな雰囲気纏っていた。

「いいでしょう、貴女が私を訳も解らず全力で止めるのならば、私は確固たる信念の下、全力で貴女を突破してみせます」

「立ち絵も無ければ細かい設定もない貴女が私に勝てるっても？」

「舐めないでください。こう見えても場数は踏んでますし、それに図書館にずっと引き込もってはいましたがどうかの誰かさんが居眠りして通した白黒魔女との弾幕ごっこでかなり鍛えられてます」

「…つまり貴方は私のお陰で強くなれたということですね!？」

小悪魔は再びドスの効いた笑みを浮かべる。

「それを咲夜さんに話して免罪符になるとでも思っていてやがるんですか？」

「ごめんなさいマジで勘弁してください」

「そうね、次に刺すナイフは5本がいいですわね」

「いきなり何言ってるのよ」

「いえ、怠惰な門番へのちようきよ……躑としてなんとなく」

「言い直す前の言葉は聞かなかったことにしてあげるわ。それからほどほどにしときなさいよ」

一瞬レミリアの表情が引きつるが敢えて流す。優美な笑みを浮かべ（多少、冷や汗を浮かべたままなのだが）、咲夜をたしなめた。レミリアはティーカップに口を付けるが、空であることに気付く。咲夜に再び紅茶を淹れてもらおうかと思ったが、少し考え直す。

「咲夜、紅茶の御代わりちょうだい。それからその隙間妖怪の分も用意してあげて」

内心、咲夜は驚くがそれを面には出さない。「畏まりました」とお辞儀をしてから、その場から姿が消える。

「随分と余裕なのね」

その時、黙っていた八雲紫がようやく言葉を発する。額に当てていた左手を下げ、レミリアに視線を向ける。

その表情にはいつも浮かべている胡散臭い笑みは無く、ただの無表情がそこにはあった。

「今がどういう状況なのか、解っているのかしら？」

「何にも知らないよ、だからこそこうしてられる」

紫は鼻で笑う。

「羨ましいわね、「無知」っていうのは」

「存外器が小さいのね。底が知れるわ」

「なんですって？」

目を細める紫に対し、レミリアは頬杖を付き、怒気を孕んだ目で見返した。

「天人が異変を起こした時も思っただけで、案外お前は自分の感情が入ると見境を無くす。それは胡散臭いお前が見せる唯一の人間臭さだけれど、それは美点であると同時に弱点でもある。そんなことは今更私が指摘しなくとも自明の理、お前自身でも気付いていること」

「……」

「不法侵入してきた無礼な輩にわざわざ紅茶を用意してやるんだ。今お前がすべきことは安い挑発をして喧嘩を売ることでは無いだろう?」

レミリアは紫からパチュリーへと視線を移す。先程から彼女は俯いたまま、動かない。

「パチエ、あんたもいつまで腐ってんのよ」

パチュリーの肩がピクリと跳ね、静かに顔を上げた。

「心外ね、ここで腐るような小娘のつもりはないんだけど」

話は聞いていたのだろう。

小悪魔が去ってから茫然自失だったパチュリーの意識が帰還する。

…憎まれ口を叩く程には回復したか。

内心でほくそ笑むレミリア。

「あら、吠えるんだったらそれなりの行動に移しなさいよ」

「私の二つ名を忘れたの？『動かざる大図書館』は身体を動かさずに頭脳を動かすのよ」

友人のちよっかいを軽くいなし、パチュリーは深く息を吐く。気を落ち着かせ、少しでも多く灰色の脳細胞を活性化させるよう意識する。

彼女は紫へと視線を移した。

「頭脳を動かすための情報が全然足りない。貴女には現状を話してもらつ。そのつもりでここに残ってたんでしょ？」

「ええ…その通りですわ」

紫は軽く肩を竦める。

「小悪魔にも任せられたし、それに現状を打破するならば私だけの力では足りないですし」

「あんたの力でも足りないって…」

レミリアは呆れる。

幻想郷の大賢者と呼ばれ、それこそ「チート」という言葉がお似合いな最強クラスの妖怪『八雲紫』が、魔理沙にいつもピチュられパチュリーの本を守り切れないあの『小悪魔』に対して力不足？

「あの小悪魔、そんなに強かったの？」

「貴女の言う『強さ』が弾幕ごっこや単純な殴り合いならば答えは「弱い」だわ。そうでなければ魔理沙にここの図書館の本を盗られるなんてことにはならないでしょ？」

「だったら何でわりと困ったちゃんなあんたが小悪魔相手に現状を打破できないのよ。焦らさないで話さないよ」

レミリアが「うー」と催促する。

彼女への応えは一先ず後に回し、紫は「座るわね」と断りを入れてから空いてる椅子に腰掛ける。彼女も彼女なりに落ち着いたらしい。その美貌をいつもの胡散臭い笑みに染める。

その時、咲夜がちょうど戻ってきた。優雅な仕草でレミリアとパチユリーの前に新しい紅茶を置き、紫の前にはぶぶ漬けを

「ちよつと待ちなさい！何これ、新手の嫌がらせ！？」

胡散臭い笑みがまた剥がれ、こめかみに青筋が浮かぶ。割りと涙目なのが萌える。

ゆかりんが何で怒ったのかを知りたい人は京都の文化を勉強しよう！咲夜は「冗談ですわ」と微笑み、ぶぶ漬けの上から白いハンカチをかける。次にハンカチを取り払った時、そこにはちゃんとぶぶ漬けではなく紅茶が置かれていた。

「咲夜」

「何でしょう」

「今のは面白かったわ、次も期待してるわ」

「有り難き御言葉」

「やられた方としては堪ったもんじゃないんだからやめてちょうだい」

この手のちよつかいは式や香霖堂の店主によくやるのだが、やられてみるとかなりうざい。これからはもう少し自重しようと思ったりとか。

パチユリーが額に手を当て、呆れたように嘆息する。

「レミイも咲夜も悪ふざけはそこまでにして。話が先に進まないわ」

「はいはい、悪かったわね。改めて聞きましょうか、あんたですら

止められないあの小悪魔、一体何者なのかしら？」

「そうね、まずはそこから話しておくべきね」

そう言って紫は咲夜の淹れた紅茶に口を付ける。

流石は紅魔館のメイド長、彼女の淹れた紅茶はとても美味しかった。瀟洒の言葉は伊達じゃない。

頭の中を整理して紡ぐ言葉を考える。自分にしては珍しい事だと、紫は思う。やはりどこか、余裕がないのかもしれない。

カップを置き、口を開く。

「現状を何も知らない貴女達に現状を聞くのがそもそも間違いでしたわね」

静寂の中に、紫の声が響く。それほど大きい声でもないのに、彼女の声はやけに響いた。

「先刻の問いの解と並行して、あの娘が何を望み何をするのか…そしてあの娘が何者なのか、話していきましょう」

時間がふと気になり、夜空を見上げた。

月、そして星の位置を頼りにざっと暗算する。おそらく夜中の3時少し前くらいだろうか。

藍は傍らに置かれたお茶を手に取り、口にする。かなり薄かった。

横目で隣に座る霊夢を見る。彼女は藍の持ってきていた煎餅を頬張っていた。

風もなく、音の死んだ世界で彼女が噛み砕く煎餅の音はよく聞こえた。

神社の縁側に並んで腰掛けている2人を月明かりが照らす。

やれやれ、呑気なものだな。

4枚目の煎餅に手を出す霊夢を見て藍は呆れながら、ゆっくりな顔でお茶を啜った。

「……あんた、人のこと言えんの？」

「いきなり何を言ってるんだお前は」

「勘よ。それからその顔やめて。なんか『夢想封印』したくなるわ」

「おお、こわいこわい」

「よしその喧嘩買ってやるわさっさとスペカ用意しろや」

「落ち着け」

警告をうざい顔をして応えたらこれである。どうも今の霊夢は虫の居所が悪い。

「紫様もそうだったが、あまり苛々すると足下捌われるぞ？」

「別に苛々してないわよ。ていうか何？あの紫が苛々してんの？」

「本人は気付いていないだろうが、少し感情的になつていたのは確かだな」

お茶をまた一口。やはり薄い。

霊夢は藍を睨む。

「逆に聞きたいんだけど、あの紫ですら今のこの状況に苛々してるっていうのに、あんたは何でそんなに落ち着いていられるわけ？」

「どうでもいいからだ」

感情を込めず、藍は無を孕ませた声音で即答する。

霊夢の表情が険しくなり、それに伴い彼女の目にも怒気が宿る。

「だったら何でここにいるのよ」

「紫様の命令だからな」

何か言おうとしてしかし霊夢は口を閉じる。

彼女は紫の式だ。故に「どうでもいい」と思っていようと、命令があればそれに従う。

…だが、気に入らない。

「『お前の腹の底から吐いた言葉でなければ、相手の心を動かすことはできない』」

藍は霊夢を向く。

「魔理沙が言ってた、外の世界の名言らしいわ。今この場で使うのはちよっと間違ってるけど、言いたいことのニュアンスとかは伝わ

るでしょ？」

たとえ式であつたとしても、たとえ命令に背けないのだとしても、彼女には　藍には「心」がある。如何に式であろうと、本気で命令に取り組まなければ思つた通りの結果は残せない、霊夢はそう言いたいのだろう。

「今のままのあんたじゃ足手まといに成りかねないわよ？少しは

」

「『足掻くことをしない輩に、救いの手は差し出されない』」

霊夢の言葉を遮つて藍は再び夜空に目を向けながら言い放つ。

「誰の言葉でもない、私の言葉だ。まあ、同じような事を言っている奴は私だけではないだろうが」

「……………」

霊夢は彼女の言いたいことがわかった。そして、彼女の考えを変えられることも、無理だということを悟つた。

藍は続ける。

「今回の…これから起こりうる異変は、リスク無しで起きる前に防ぐ方法もあれば起きた後に防ぐ方法もある。あいつは…今は紅魔館の連中に「小悪魔」と呼ばれているんだっただか？あの小悪魔を殺してしまえば済む話なんだ。スペルカードルールを真つ向から否定する方法だがな、そこはまあ、紫様のことだから上手くやるだろう」

「だけど紫様は小悪魔を殺さず、あくまで「異変」として解決することを選んだ。言うまでもハイリスクだ。何せ向こうは手加減無しで殺生も辞さない。手枷足枷掛けられてこちらが不利になるのは火を見るよりも明らか」

『殺し』というカードは一度使えば後戻りはできないが、手段として応用が効きやすい。

相手の駒の排除はその最たる例だろう。

しかし、紫は幻想郷のルールに則つて、そのカードを封印した。駒を殺とらずに将棋やチェスで勝てないのは当たり前。しかし、紫は

それを実行しようとしている。

「自分の腕に余程の自信があるのか、そうでなければ極度のマゾヒズムか、いずれにせよ正気の沙汰を疑うような縛りプレイだ。幻想郷の創始者であるが故にそのルールに縛られているのかもしれないけど、実際は違うだろう。あの人は「あの時」彼女を…小悪魔を救えなかったことへの罪悪感に縛られている」

夜空から霊夢へと視線を戻す。

「お前もな。そうでなければ普段は乗り気じゃない異変に最初から自分で動こうなんて思わないだろう？」

「……………」

霊夢は答えない。

しかし、苛立たしげに煎餅を噛み砕くその仕草が凶星だったことを暗に示す。それがわかつているのか、霊夢の表情はますます不機嫌色に染まる。

「…だったら何だって言うのよ。私や紫のやり方が気に入らないならそう言いなさいよ」

「最初に言っただろう？ 私は今回の異変はどうでもいいんだよ。気に入るとか気に入らないとか、何とも思わんよ。ただ……」

「…何よ」

藍は途中で言葉を止め、新しく淹れたお茶を啜る。時間は経っていったがまだ熱い。ほう、と熱の籠った吐息を吐く。

「2人のやり方は、とても優しい」

「はあ？」

思わず間の抜けた声を上げる霊夢。

「何それ、私達のやり方が「甘い」って言いたいわけ？」

「私は言葉以上の事は口にしていないよ」

だとしたら何だと言うのか。霊夢には藍の真意が図りかねた。

「幻想郷は全てを受け入れる。それはそれは残酷なこと」

藍は続ける。

「私と小悪魔は鏡写しのようにそっくりなんだ。その傷の深さはと

もあれ：私達の根底には同じものが宿っている」

無音だった景色に風の音が加わる。それに伴い木々の音が辺りを包む。

「幻想郷は私を受け入れた。どこまでもどこまでも穢れに汚れた私を。石に封印された私を受け入れた。だとしたら根底が同じである小悪魔が幻想郷に受け入れられない道理がない。だけど」

藍の目に虚無が宿る。霊夢は黙って彼女の言葉に耳を傾ける。

「小悪魔は：あいつは、足掻くことを放棄した」

風が止み、辺りを再び無音が包む。

「同じ絶望の淵に立たされた時、私は足掻き、小悪魔は流された。根本が同じであっても枝葉の行く先には当然の事ながら差が出る。

陽に向かって伸びるか、重力に従って伸びるか。太陽は下にいる奴には目を向けない。ただ目立つ所にいる奴に適当に陽の光を当てるだけ。今の小悪魔じゃいつまで経っても陽の光を浴びる事なんて出来やしない。いずれは朽ち果てる」

それまで黙って話を聞いていた霊夢が小さくなった煎餅を口に放り、藍の顔を覗き込む。

「あんたさあ、何だかんだ言って小悪魔には救われて欲しいんじゃないの？」

「かもしれないな」

藍は苦笑する。

「さっきも言ったが私とあいつはまるで鏡像だ。姿や性格こそ違いつし、あいつの抱いた絶望は知らないが、似た境遇・似た過去であるというだけでどこかシンパシーを感じるよ」

「だったら」

「だけど私は、それだけであいつに自ら進んで手を差しのべることはいらないよ。私はそこまで優しく出来てない。お前や紫様と違ってな」

「…あつそ」

「まあ、心底どうでもいいとは思っているが手は抜かんさ。保証は

できないがね」

霊夢は答えない。

その点についてはもう心配していなかった。

彼女の言うことも解る気がする。どれだけ手を差し伸べても、本人に救われる気がないのなら意味はない。たとえ救えたとしても、本人の気が変わらないのならまた堕ちていくだろう。

だが、それがどうした？

その気にならないのならその気にさせればいい。

小悪魔の気持ちだとか知ったこっちゃない。己のやりたいようにやるだけだ。

博麗霊夢はあらゆるものに縛られない。縛るものは己の欲求だけでいい。

そして藍も、何だかんだ言って本気でこの異変に取り組んでくれるだろう。彼女は確かに心底どうでもいいと思っているが、それと同時に小悪魔には救われて欲しいとも思っている。だとしたら大丈夫だ。

自ら進んで手を差し伸べることはしないだろうが、命令されて、その命令が自分の望む結果をもたらすなら彼女はその命令を全力で実行するだろう。

後は紫がもう少し頭を冷やせば何も問題はないだろう。

ああ、それでも…

「めんどくさいわね、本当にめんどくさい」

「まったくだ」

小悪魔自身が、最初からその気ならばわざわざこんな回りくどいことをせずに済んだのに。何故こうも単純に物事は上手くいかないのか。

「ほんと、どこまでもどこまでも世界は優しくないわね」

「『この世はとにかく生き難い』だったかな？」

「夏目漱石作『なつちゃん』だっけ？」

「『坊っちゃん』だ。どこの飲料水だそれは」

2人は夜空を見上げた。

藍は思う。今頃紫は、紅魔館の連中に現状を説明している所だろうか。

開戦にはまだまだ時間がある。

幻想郷の夜はまだ明けない。

第4話 ネクロフィリアは誰に似る？

弾幕勝負が始まってからまだ10分も経過していない。

だがその10分は、この戦いがどういうものなのかを2人が知るには十分過ぎる時間だった。

小悪魔が4枚の羽から放つレーザーは美鈴の動きを制限する。蝙蝠の翼手のような悪魔の翼、人の手で言えば指先にあたる部分から放たれるレーザーは計12本。それら全てが常時放たれ続け、しかも直接狙わず美鈴が動く先を読んでレーザーが配置されるものだから美鈴にしてみれば非常に動きづらい。何気にこのレーザー、威力がそこそこ高いからなるべく当たりたくはない。動きが直線なのがまだ救いか。

小悪魔の手から放たれる数十発の弾幕にも気を配らないとならない。レーザーの合間を掻い潜って避けた先に弾幕が放たれる。完全に計算された動きだ。全て読まれている。近付けない。

「（成る程ね、これだけの弾幕が張れるなら魔理沙さん相手にも善戦できるわね。もっともあの娘はこの手の弾幕は全部火力で押しきつちゃうから…魔理沙さんに勝てないのは単純な相性の問題か）」弾幕の火力に欠け、どちらかと言うと肉弾戦の方が得意な美鈴にとってこの弾幕は辛い。

対する小悪魔も、この状況に正直辟易していた。

翼手からレーザーを放ち相手の動きに制限を掛け、相手がレーザーの合間を避けるその進路を予測して段幕を放つ。

ここまでは良い。

見ると美鈴は非常に戦いにくそうな表情をしている。小悪魔の戦術がかなり刺さっているのだろう。

ここまでは良いのだ。

ここまでは。

問題は

「（いやいやいやいや！幾らなんでも速すぎるでしょ！！）」

彼女の動きが速い。速すぎる。

動きは読めるのだが、それにしたってここまで速く動かれたら、こちらもそれ相応の対応をしなければ対策が間に合わない。

「（そういえば彼女は弾幕戦よりも肉弾戦の方が得意だったわけ。

だとしたらあれだけの身体能力の高さも頷ける）」

早打ちの将棋を強要させられている気分だがそんなこと言ってられない。

おまけに小悪魔は高威力の弾幕を持っていない。翼から放たれているこのレーザーがかなり強力なのだが、範囲は狭いし軌道が直線のため狙って当てるのは難しい。だからこそ相手に対する牽制としての用途で使用する他ない。

たとえ直線でもマスリースパークのような広範囲の極太レーザーならばまだいいのだが、無い物ねだりをして仕方がない。

この弾幕、少しでも穴を作れば

「（一気に間合いを詰められるよねえ……）」

彼女相手に一度詰められた間合いを離すのは至難の技。そうする暇もなく、美鈴得意の接近戦を強要されるだろう。

しかし、手がない。相手を縛れているが決め手がない。

「（時間の問題か、このままでいけばいずれ弾幕に穴が生じる。その隙を突いて一気に接近してこちらの得意な間合いに持っていく）」
美鈴は考える。

この戦いの流れは今のところ自分に向いている。

この戦いはどちらが先にミスを誘発するか of 徹底的な持久戦。体力と集中力の高さが勝敗に直結する、精神的にも辛い長期戦だ。しかし、それだけではない。

美鈴は小悪魔が読み間違え、弾幕の穴を突いて接近した時、その時点で小悪魔は事実上敗北している。

小悪魔はそこまで接近戦が弱いわけではない。一度は距離を詰めて接近戦に持ち込めたのだが、予想外の手数多さに不意を突かれ距

離を離されたのだ。美鈴相手に不意を突くことができる程度の体術を小悪魔は備えている。

しかし、その程度だ。美鈴には遠く及ばない。本人にもそれが解っているからこそ、こうして遠距離からの弾幕で距離を保っているのだ。次に接近戦に持ち込まれたとき、不意を突く一手は小悪魔には残されていない。

それに美鈴だって小悪魔の弾幕をただ避けているわけではない。弾幕が止む、その合間に小悪魔に向け弾幕を数十発放っている。小悪魔はその弾幕にも気を向けなければならず、長期的にこれをやられたら体力的にも精神的にも消耗する。

そんな時にミスを誘発して美鈴に接近されたら小悪魔にはお手上げである。

対する小悪魔は美鈴とは違い決め手がない。仮に美鈴がミスしても威力の低い弾幕だ、大量に当たればリターンは稼げるがそんなミスをするとは思えない。レーザーも威力は高いが弾幕と同じで当たるようなミスをするとは思えない。そもそも美鈴相手に体力と集中力の勝負になった時点で不利なのだ。

たとえこの遠距離を保てたとしても時間稼ぎにしかない。時間はただ過ぎるだけ。

しかし時間が過ぎるほどに小悪魔の体力・精神的に考えれば不利になる。

完全な悪循環だ。

「いつまでこんなこと続ける気ですか？」

美鈴が弾幕を放つ。

小悪魔は避ける際に生じる弾幕の穴を防ぐために多めに弾幕を放つてから最小限の動きで移動する。

「このまま続けても戦いの示す軌跡の先にあるのは貴女の敗北ですよ？」

美鈴の言葉に小悪魔は答えない。

ただ今までの動きを繰り返すだけ。

不意に小悪魔が答える。

「ようするに、勝負に出ると？」

「そういうことです。貴女の翼から出てるそのレーザー、今はこんな風に私の動きを牽制する用途でしか使われていませんがこれ、かなり威力高いですよね」

「あ、判ります？」

「だから貴女の放つ弾幕よりもこちらに気を配ってるんです。このレーザー、牽制に使わず一か八か私に当ててみたらどうですか？」
「……………」

本当に本当に…

好人そうな顔して…

どこまでもどこまでも腹が黒い！！

「性格悪いですね」

「私、戦いには厳しいんです」

「そんな「脱ぐと凄い」みたいなノリで言われても」

「言ってないわよ」

少し顔が赤い、意外と初である。

やれやれ、と小悪魔は嘆息する。

美鈴の言う通り、羽から放たれているレーザーを直接当てるという選択肢も存在する。しかし2・3発当てたくらいで戦闘不能に出来るほどの威力はないし美鈴だって脆くはない。それにレーザーを攻撃として使えば当然、牽制の役割は果たせない。自ら隙を作るようなものだ。

攻撃は最大の防御と言うが、攻撃は同時に隙を生み出すとも言つ。そもそもそんな理論は範囲弾幕や魔理沙の放つマスターパーク等の極太レーザーのような広範囲且つ高威力な攻撃だからこそ通用するのであつて小悪魔のような狭範囲で威力そこそこな攻撃では「攻撃は最大の防御」なんて言えたもんじゃない。

軌道が直線で当てるのが困難なレーザー、おまけに決定的な隙を作りかねないがそうでもしなければ決め手がない。戦術的に破綻しているが仕方がない。このままだといずれ負けるのだ。

故に「如何に美鈴の隙を突き、レーザーを当てるか」が課題となるわけだが…事実上、この手は封じられた。

美鈴が自分から「レーザーを当てたら？」と言ってきた。彼女は小悪魔にその手しか残されていないことに気付いてる。だからこそ自分からわざわざ言ったのだ。

不意打ちをしろと言われて不意打ちをしても成功率は著しく低い。かといってこのままでは敗北の道しかない。となると、小悪魔が勝つための道は一つしかない。

「（「不意打ちをしてくる」と警戒している私に不意打ちをするのと。貴女にはもう、それしか手は残されていない）」
追い詰められる小悪魔。2人の実力差が直接響く。

「どうしたんですか小悪魔さん！このままだと」

「押しきれますよ」と続く筈の美鈴の口が閉じる。

感じたのは悪寒。背中を蟲が這うような冷気が走る。

小悪魔の口の両端が吊り上がり、邪悪な笑みを向けてくる。

「良いことを教えてあげましょう、美鈴様。私はね」

ギャンフラ
賭博師じゃないんですよ

「あの娘は…小悪魔はね、私の式に似てるのよ」

数瞬を静寂が支配する世界に紫の声が割って入る。

紫の言葉にレミリア、パチュリー、咲夜は皆一様に眉をひそめる。

「あんたの式つて八雲藍のこと？あれと小悪魔のどこが似てるのよ」
少なくとも2人の容姿はまったく違う。似てる要素を探す方が難しいくらい似ていないが、それでも尚、その2人を「似ている」と称するということは

「容姿じゃないわ。性質：かしらね」

「性質？」

「貴女達、『九尾の狐』の伝説はどこまで知ってる？」

また話が飛ぶ。

頭がついていけないが、それでもレミリアとパチュリーは簡潔に答える。

「人じゃないけど人並みには」

「同じく」

「なら充分よ。まあ、一応ざつと説明させてもらうなら昔、美女に化けて上皇を誘惑することで幾つもの國を転覆させ滅ぼしたり、退治され石に化けて殺生石になったり、数々の伝説が語り継がれてるわ」

「え？」

レミリアが目丸くする。紫は怪訝な表情を向けた。

「どうしたの？」

「いや、私が知ってる九尾の狐と違うなと思って」

「ポ○モンのキュウ○ンとかいう落ちだったら陽の下に放り出すわよ？」

「何でもないわ紫先に進めて早く」

何かが覚醒したパチュリーの威圧に圧されカリスマがブレイクしかけるレミリア。主人が脅されてるのに、その怯える姿を見てうつとりとしている咲夜はさすが瀟洒である。

「…ええと、まあ、とにかくそんなところよ。細かいことは古い文献でも漁ればわかるし、この場では割愛させてもらうわ」

「つまり貴女の式であるあの八雲藍は、その伝説にもなった狐ということよね。それと小悪魔にどう関係が？」

話の繋がりから予測し、簡潔にまとめて先を促すパチュリー。紫は紅茶を口に含んでから続ける。

「簡潔に言っわ。小悪魔は昔の藍のように、國や樂園、一つのコミユニティを崩壊させる性質を持つ悪魔なのよ。そして彼女が次に壊すターゲットはここ　幻想郷よ」

「………」

レミリアとパチュリー、そして咲夜の間に妙な空気が流れる。しばらく沈黙していた3人だが、やがてレミリアが口を開く。

「それはまた…随分と厨二ツクな性質ね。國とか滅ぼしたりして最終的には何が目的なのよ？」

「目的なんてないわ。貴女は妖怪が人を襲うことに目的を見出だせる？」

「…ああ、成る程ね」

つまり目的も何もない。「そういうもの」なのだ。そこに理由も何も存在しない。

「彼女が幻想郷に来たのは10年前。まだ幼い霊夢の暮らす博麗神社にやって来たのよ。それはもう凄い傷だね」

「…ああ、その時に貴女は小悪魔と知り合ったのね」

パチュリーは先程から抱いていた疑問が解決する。しかし、レミリアはそれとは違う点が気になった。

「ちよつと待った。博麗神社に現れたということは霊夢も小悪魔と知り合いなの？」

「そうよ。それだけでなく霊夢は小悪魔が動いていることを既に知っていると思うわ」

レミリア達は再び沈黙する。予想以上の答えに戸惑い、彼女達の頭の中で話が繋がらない。

「…話が見えないわね。ここにいない霊夢がどうして小悪魔が動いていることを知ってるのよ」

「貴女達は、小悪魔が本気で幻想郷を壊したいと思ってる？」

「また話が飛んだわね。まあ、答えは「NO」だわ。小悪魔が幻想郷に来たのは10年も前なんですよ？幻想郷を本気で壊すつもりならもっと早く動いてるだろうし、この10年が準備期間だとしたならば、あまりにも動きが無すぎる」

「その通り。小悪魔はこの幻想郷を…いえ、彼女は一つの楽園を壊すことすら忌避してる。事実、彼女がここに来たのもそういう狂気を抱く自分に自己嫌悪して、自分の存在を滅した事で幻想郷に吸い寄せられたからなのよ」

パチュリーは、自分の頬が強張るのを感じた。

さらりと何でもないように紫は言つてのけたが…小悪魔は、一度自殺未遂をしている。彼女はそこまで追い詰められていたのだ。

「パチエ」

ピクリと、肩が震えた。暗い闇に堕ちかけた意識が帰還する。

レミリアがじつと、パチュリーの顔を見つめていた。

「しっかりしなさい。今はもっと大事なことがあるでしょ」

「…そうね、レミィ。今は話を聞くときだったわね」

後悔する場面はもう過ぎていくというのに、解つていても意識はそこに堕ちてしまう。こんな時、パチュリーは心底レミリアを尊敬する。こういう時の彼女はとても強い。それは、そういう苦難を幾度も乗り越えたという裏返しでもあるのだ。

「気持ちは解らなくもないけれどね」

レミリアとパチュリーは紫の方を向く。紫は軽く苦笑する。

「彼女の持つ『衝動』はさっきも言った通り妖怪が人を襲うような明確な理由が存在しないもののよ。そういった境界線があやふやなものは私の能力ではどうにもできない。こういう大事な時に当てにならないのよ、私の能力は」

彼女には珍しい自虐的な物言いだった。彼女の放つ言葉には小悪魔

に對してとその他の誰かに對して向けられているように感じた。
パチュリーがふと、思案する。

「…靈夢もこの異変については知っているのよね」

「さっきも言った通りですわ。靈夢はこの異変に気付いているし、
起きることも知っていたと思うわ」

「思っただけで、今回の異変の始まりと貴女達の「約束」は何か
関係があるの？」

紫は一瞬目を丸くした後、微笑する。

「頭が回ってきたみたいね。その通りよ」

「パチエ、どういうこと？ そういえばさっきも「約束を果たす時」
と言ってたわね」

「その事についても説明するわ。それから…」

紫の背後でスキマが開く。そしてそこから何かが落ちてきた。

黒い髪

腋の開いた巫女服

赤いリボン

腋の開いた巫女服

博麗靈夢が口に煎餅をくわえた状態でひっくり返っていた。

「…何で腋を二度も言うのよ…」

「そこには貴女の全ての個性が集約されているからよ」

「あんたホントもう黙れ」

靈夢が紫を睨む。

「いきなり何よ。用があるなら呼びなさいよ、今日ぐらいいは素直に
行ってあげようと思ってたのに」

「この方が手っ取り早いんだもの」

「藍はどうすんのよ？」

「あの子はあのままでいいわ。今はね」

「あっそ」

起き上がり、レミリアに「座るわよ」と言ってから椅子を引いて紫のとなりに座る。

そしてレミリアの後ろに控える咲夜に視線を向ける。

「お茶」

「紅茶ならありますわ」

「いや、私が手に持つてるのわかんない？煎餅にはお茶が」

「紅茶ならありますわ」

「こんなにでかいところにお茶の一つも無いの！？」

「大きい小さいかは関係ない。「物」が存在するにはその「場所」との因果関係の結び付きが必要。「和」である「お茶」が「洋」である「紅魔館」に無いのもまた必然ですわ」

「紫みたいな屁理屈抜かしてんじゃないわよ。…無駄に筋が通ってるから余計に腹立つわ」

「まあ、あるんだけどお嬢様方と別で用意するのが面倒なのよね」

「…もう紅茶でいいわよ。なんか疲れたわ」

素が出た咲夜にげんなりとする霊夢。咲夜は「畏まりました」と優雅に微笑んでから一瞬だけ消え、その手にお茶を持って現れると霊夢の前に置く。

「…お茶用意するの面倒じゃなかったの？」

「出さないとは言ってないわよ？」

「……………」

何も言わずお茶を啜る。真面目に相手にするのがそもその間違いだった。いつもなら流すのだが、今日は調子が悪い。

「…紫、どうしてわざわざ霊夢をここに連れてきたのよ」

「説明が楽になるからよ。これから話す内容は霊夢にも知っておいて欲しい事だし、逆に霊夢と私が知っている事も貴女達に教える必要がある」

レミリアの質問に答え、紫は紅茶をまた口にする。

レミリアは「ふーん？」と首を傾げ、紫に習って紅茶を啜る。

「霊夢、それから紫にも。貴女達二人に質問があるんだけど」

「何かしら？」

紫はレミリアの質問の先を促し、霊夢はお茶を味わいながら無言でレミリアに視線を向ける。

「小悪魔はどんな合図を貴女達に送ったの？」

紫が目丸くし、霊夢がお茶を気管支に誤って入れてしまう。

咳を連発する霊夢に咲夜は「大丈夫？」と気遣う。霊夢は片手を上げ、なんとか応えた。

霊夢の咳が収まってからパチュリーはレミリアに怪訝な表情を向ける。

「レミイ、今の質問はどういう意味？」

「さつきパチエが言ってたじゃない、「今回の異変の始まりと『約束』は無関係じゃない」って。さつきまでずっとその事について考えてただけど、意外と簡単なロジックだね。小悪魔の事をこれだけ詳しく知っていてあの娘の気持ちも理解しているということは紫と霊夢があの小悪魔と、少なくとも浅くない関係だということは猿でもわかる。『異変が起きることを知っている』『異変が起きたことを知っている』『小悪魔の本心を知っている』、そして…『果たすべき約束』。これらキーワードから必然的に結論はそこに辿り着く」

レミリアは背もたれに体重をかけ、お腹の前で手を組み、高い天井を見上げながら続ける。

「小悪魔の性質は本人にも制御できない「狂気」であり、小悪魔が幻想郷を壊すことを望んでいなかったとしたら「異変を起こしたら自分を殺しても止めて欲しい」みたいな事を小悪魔が貴女達に言ってもおかしくない。そして小悪魔は少しでも自分が不利になるように自分が異変を起こすとき、その目印または合図として貴女達に

何かしらの手段を用いて伝えている筈なのよ。これはわざわざ貴女達と約束を交わすくらいだし、何よりも今まで繋がりの方無かったかのように見えた紫があまりにも都合の良いタイミングでこの場に現れたことが証明してるわ」

レミリアは紫へと視線を戻す。

「もつともそんな理屈を抜きにしても、貴女達の反応が充分に答えを示してるんだけどね？」

「…それで？」

霊夢が咽の違和感に顔をしかめ、軽い咳をしながらレミリアを睨む。
「確かにあんたの言う通りよ。私達はあいつから合図があつて異変が起きたことを知ったわ」

「その「合図」って？」

「「開戦の合図は赤いリボン」だつてさ」

そう言つて霊夢が袖口から取り出したのは赤いリボンだった。レミリアはそのリボンを見て、妙な既視感を覚える。

「それ、貴女の頭に付けてるリボンに似てるわね」

「似てるも何も同じものよ。私が小さい時にあいつにあげたんだもの」

パチュリーと霊夢のやりとりでレミリアは己の感じた既視感に納得する。

「そのリボンが合図なの？」

「そ、あいつが私の所に何らかの手段でこのリボンを返した時が私に対しての開戦の合図。あいつが紫にどういつ合図を送ったのかは知らないけどね」

霊夢は紫へと視線を向ける。どうやら小悪魔が二人に送った合図はそれぞれ別のものらしい。

「確かに霊夢の言う通り、私に送られた小悪魔からの合図は霊夢とは違うわ。でも、無関係じゃないのよね」

「…どういつこと？」

「小悪魔は何らかの条件を満たした時、それをトリガーとして発動

する『目印』を用意していたのよ。同じ条件で発動する『目印』を二つね」

紫は懐から長方形のガラス板を取り出す。それには複雑な幾何学模様が描かれていた。

「これと同じ物を小悪魔も持っているわ。元は何も描かれていない無色透明のガラス板だけど、一定の条件を満たした時に今みたいな模様が浮かび上がるのよ」

「同じ物を二つ…ね」

霊夢とパチュリーが顔をしかめる。

異変を『起こす側』である小悪魔が異変を起こすときに発動する目印を持つ意味は限られる。それはそうだ、普通に考えれば異変を起こす側である小悪魔が『小悪魔が異変を起こす時』に発動する目印を持つていても意味はない。

霊夢や紫と違い、小悪魔は自分が異変を起こす時を知っているのだから当然である。にも関わらず小悪魔が目印を持っているということとは この目印は『小悪魔が異変を起こすときに発動する』のではなく、ある『一定の条件を満たした時に小悪魔が異変を起こす』為の目印ということになる。

小悪魔は自分から異変を起こそうとはしなかったのである。

霊夢は溜め息を吐く。

「難儀な話だわ。そんなに異変を起こしたくないなら、もっと他にやり方があったでしょうに…」

「今更な話よ。己の意識が狂気と正気の狭間にあつて、その中でジレンマに陥ったりしたら受動態にもなりたくなるわ」

レミリアの言葉に霊夢も「それもそうね」と納得せざるを得ない。狂気と正気の狭間で苦しみ、幽閉せざるを得なかった妹を抱えている彼女にも思うところがあるのだろう。

レミリアは似合わない咳払いをする。

「で、紫の話からすると小悪魔は何らかの条件を満たした時に異変を起こすことにしてたみたいだけど、そのトリガーはわかってるの

？」

「先程も言いましたがこのガラス板と霊夢のリボンは無関係じゃないのよ。ガラス板に模様が浮かび上がる条件はリボンが高い魔力・妖力・霊力を保有する物の手に渡った時」

霊夢が飲んでいたお茶を嘔き出す。一同の冷やかな視線が霊夢に向く。

「汚いわねえ。大人しく飲めないの？」

「げほッ、がハッ、ひでぶっ…うるさいわね！あんた達も私の立場だったら同じようになるわよ」

霊夢がレミリアを睨む。

「開戦の合図としてこのリボンを私に渡したのは魔理沙なのよ！」

びきっ

パチュリー、咲夜の動きが固まる。つまりあの赤いリボンは魔理沙がこの図書館に侵入してきた時に本と一緒に盗み、それが霊夢の手に渡ったことになる。

ようするに、どっかの誰かさんがしっかりしていれば魔理沙がここに侵入することは無かった訳で

「…あの門番、そろそろ解雇する事を視野に入れた方がいいですね…」

当然、咲夜の怒りは美鈴に向かう。美鈴終了のお知らせである。

「だから程々にしときなさいってば。この図書館の管理を怠った私にも責任はあるんだし」

パチュリーは額に手をあてる。「自分がちゃんとしていれば」ということは考えない。考えたところで時間の無駄だということはレミリアに学習させられた。

今考えるべきことは他にある。

「霊夢、魔理沙は何でこのリボンを貴女の所に持ってきたの？」

同じことを疑問に感じていたらしいレミリアが、パチュリーの先を

越して質問する。

あの魔理沙が小悪魔の言うことを素直に聞いてリボンを渡しに行くとは考えにくい。そもそも小悪魔はこの図書館から出ていったばかりであり、魔理沙に「霊夢にリボンを渡して欲しい」と伝えるのは物理的に無理なのだ。

もつともパチュリーはこの質問の答えが予想できているのだが。「魔理沙、ドジやらかして小悪魔に呪いを掛けられたみたいよ。頭に猫耳が生えてたわね」

「…はあ？」

レミリアの表情がひきつる。

魔女っ娘に猫耳という組み合わせにも色々と思うところはあるが、それ以上に魔理沙に猫耳が生えたところを想像しているであろう霊夢の表情に危ないものを感じる。

「頭に猫耳が生えるって…どんな呪いよ」

「さあ？魔理沙のやつは頭から猫耳を取ってもらったために小悪魔の言うことを聞いているっばいけど」

「そんなに緩い拘束力じゃないわよ、小悪魔の呪いは」

口を挟んできた紫に霊夢とレミリアが怪訝な表情を向けた。しかし、紫の表情にどこか鬼気迫るものを感じ、二人の顔が若干強張る。

「…どういうこと？」

「貴女に渡されたそのリボンには特殊な術式が組み込まれてるのよ。その術式こそがこのガラス板に模様を浮かび上げらせ、そしてリボンを手にした者に呪いを掛ける力があるんだけど」

言葉を切り、パチュリーに視線を向けてから続ける。

「「餅は餅屋」ね。貴女の方が私より上手く説明できるんじゃない？」

「あら、貴女にしては殊勝な心掛けね」

魔術や術式は魔術師であるパチュリーの得意分野であることは言わずもがな。

軽口を言ってからパチュリーは紅茶を口に含む。

「色々詳しい事情があるんだけど、とりあえずその辺の説明は後にして答えから先に話すわ」

軽く紫に視線を向ける。

これから言うことは、この状況がもはや気晴らしに起こされた異変とは次元が違うという現実をこの場にいる者に叩きつけるだろう。体よく嫌な役を押し付けられたと、パチュリーは思う。

「単刀直入に言わせてもらおうわ。霧雨魔理沙、このままだとあの娘は

死ぬわ」

第5話 アウトサイダー イン アウトサイド

黒いとんがり帽子の中で、本来なら人間にはあるはずのない猫の耳がピクリと動く。

霧雨魔理沙は目を丸くして目の前にいる人物に問い掛けた。

「何でここにいるんだ？…アリス」

「大した用は無いわ」

七色の人形遣い アリス・マーガトロイドは薄く微笑んだ。冷たい夜風が彼女の金色の髪を撫でる。右手を腰にあて、もう片方の手には魔導書があった。

月夜に照らされる姿は神秘的ですらあったが、それ以上に何か嫌なものを感じる。

「魔法の森で…あなたの家の方角から妙な魔力を感じてね。いつもみたいな魔法の実験で発生したものかと思ってたんだけど…それにしては魔力の形が整いすぎてるもの」

「暗に私の魔法は雑だと言いやがったな」「否定できる？」

「豪快だと言ってくれ」

「同じことだわ」

魔理沙は「むう」と唸り、夜空を見上げる。空がいつもより近い。己を乗せ空中で停止している筈を軽く握った。

彼女達は博麗神社から少し離れた所の上空にいる。震える程ではないにしても寒い。

魔理沙はアリスへと視線を戻した。

「…それで？こんな所にいる理由はそれだけか？」

「いいえ、それだけじゃないわ」

アリスはそう言って手を翳す。それに呼応するように彼女の回りに小さい人形達がそれぞれ手に武器を握って現れた。

「あなたから異変の匂いがするのよねえ」

「…まあ、そんな理由だとは思ってたさ」

魔理沙は溜め息を吐く。今は弾幕ごっこの気分ではない。そもそも異変の主催者様に霊夢に赤いリボンを渡す以外にもやることを頼まれているのだ。時間が惜しい。

「で、今はご勘弁という願いを聞き入れる気は？」

「あると思う？」

「あつたら良いなあとは思う」

「残念でした、ありません」

「ですよネー」

色々と難儀な女だと思う。他人に無関心で独りを好む癖に世話好きでお節介だつたり。全力を出したがない癖に異変解決には積極的だつたり。あれか、これが世に言うツンデレか。

「なんか汚された気がするわ」

「いきなり何を言つとるんだ、お前は」

「気にしないで。神の声に嫌な欲望を向けただけだから」

「このやり取り2度目なんだが」

「それなら次もあるかも？」

「なにそれこわい」

アリスは「ふーん？」と言って首を傾げる。肩まで伸びた金糸のような髪がサラリと動いた。

「それじゃあ死ぬのは怖くない？」

「人並みには怖いぜ？何だ、「殺すぞ」って脅したいのか？」

「そうじゃないのはあなたが一番、解つてると思うんだけどなー」

アリスの蒼い目が細くなる。

どこか刺のある空気が辺りに漂い始めた。

「あなた、今のままだと　死ぬわよ？」

魔理沙は笑う。そして帽子を外して片手で胸に抱く。彼女の頭にあるのは一對の猫耳。

「ああ、知ってるぜ。…それがどうかしたか？」

アリスの鋭い視線が彼女を射抜く。魔理沙は変わらず、微笑んだ。

「…どういうこと？」

パチュリーは霊夢の方を向く。

声にも表情にも、色は無い。一切の感情を今の彼女から感じとることはできなかった。

それが冷静であるが故、ではなくあまりの事実理解が追い付かないが故の無表情であることをパチュリーは知っていた。

「そのままの意味よ、魔理沙はもって数週間：早ければ2、3日で死ぬ」

パチュリーは身体を伸ばして霊夢の前に置かれた赤いリボンを取る。そして自分の目の前でそれを広げて見せた。

「魔理沙に生えた猫耳。それと小悪魔は魔力でできた線のような物で繋がってるの。この線を通じて小悪魔は魔理沙に「声」を伝える事ができるわ」

「それって早苗の家にあった「でんわ」みたいなやつ？」

「…ああ、河童の所にもあったあれね。あれとは違って魔理沙の猫耳は受信しかできないけど、そう思ってくれて構わないわ」

「成る程、この図書館から出ていってすぐに魔理沙を霊夢の所に行かせられたのはその猫耳があったからなのね。でもそれだけだと特に害は無いんじゃない？魔理沙が小悪魔の命令を素直に聞く理由にもならないわ」

「簡単な話よ。よく考えてみて、レミイ」

パチュリーはレミリアにそう言うてから机に広げられたリボンに手を翳した。しばらくすると淡い光を伴い、複雑な模様が浮かび上がる。

「レミイも魔法に関しては少しは通じてるからある程度は解ると思うけど、この模様こそが小悪魔の練り上げた魔法の術式ね。魔法の起動条件と起動後の動作がプログラミングされてるのだけれど、こ

のプログラムには魔理沙の頭に小悪魔の声や術式を受信できる猫耳を生やす動作しか記されていないのよ」

「…つまり？」

「魔理沙の頭に猫耳が生えた後、猫耳が受信する情報が彼女の脳に与える負担をこの術式は軽減しない」

レミリア、霊夢はそこまで聞いて理解する。先刻パチュリーが言った通りだ。理屈は確かに簡単である。

「今、彼女の脳は小悪魔からの声を受信する度に相当な負担が掛けられている。彼女が小悪魔の命令を無視して小悪魔から何回も声を送られたら、彼女の脳に掛けられる負担は更に増す。最悪、脳死なんてことも有り得るわ」

「あまり「死」というものを甘く見ないことね。あなたは白玉楼の亡霊嬢や死神、閻魔に会ってるから死後の世界を知っているけど、本来「死」というものは「終わり」であって未知のものなのよ」

「…ふーん。それで？お前は結局何が言いたいんだ？」

「小娘が調子こいてんじゃないかねえつつつてんのよ」

怒鳴ったわけではない。それでも確かに、空気は震えた。アリスの静かなる威圧感が魔理沙にプレッシャーを与える。

しかし、彼女はそれに圧されない。呆れるように溜め息を吐いた。

「アリス、そういうのを何て言うか知ってるか？」

「…何よ」

「「今更な話」だ」

魔理沙は箒をぽんぽん、と軽く叩く。

「私の二つ名は『普通の魔法使い』だ。上手いネーミングセンスだよな。確かに普通の人間から見たら私は異端児かも知れない。だけど幻想郷に蔓延る妖怪・妖精・神々にしてみれば私はお前が言うようにただの「小娘」に過ぎない。同じ人間の枠で比較しても霊夢や咲夜、早苗に私は能力・才能いずれにせよ及ばない」

魔理沙の言葉に己を卑下するような響きは無。それが却ってアリスには違和感に感じた。彼女の言葉はどこまでも客観的だ。

「私は確かに魔法使いだ。けど私は凡人だ。それは誰よりも私がよく知ってる。故に私は『普通の魔法使い』なんだよ。さて、そんな凡人である私がお前ら化け物を穿つにはどうすれば良いと思う？」
魔理沙は帽子を被り、そして人差し指を立てる。

「簡単なことだ。狂えばいい」

そう言つて魔理沙は笑う。その笑みにどこか危ういものを感じる。

「ようは気の持ち方さ。所謂「自己暗示」だ。身体面でお前らに勝てないならば精神面で勝てばいい」

「随分と甘い考えね。それこそあなたに勝ち目は無いじゃない。精神面で比較しても、私達のそれはあなた達凡人を遥かに凌駕している」

「甘いのはお前だよ、アリス」

魔理沙は鼻で笑う。

「私の死は私自身を拘束しない」

「…死ぬのが怖くないとでも？」

「死ぬのは怖いぜ？それは先刻私が言った通りだ。けどなあ、それ以上に私はお前達に勝ちたいんだよ。そしてこの気持ちの原動力こそ、お前達化け物が精神面では私を超えられない要因だ」

アリスは眉をひそめた。魔理沙の言葉の真意が掴めない。ただの言葉遊びのような響きもあれば、どこまでも直向きな想いも感じ取れ

る。

「お前達は気分屋だがそれ以上に利己的だ。故にお前らの原動力には常に損得が絡む。故にお前達は私には勝てない」

「意味が解らないわ」

「いずれ解るさ。それもすぐ後で、お前の身を以て理解する」

「…へえ」

つまり、魔理沙はここでアリスを負かすということだ。アリスは口の両端を吊り上げる。

「面白いじゃない。やれるものならやってみなさいな」

「言われなくてもやるぜ。…おっと、その前に質問だ」

「この期に及んで何よ」

アリスは魔理沙に対して軽い失望感を覚えていた。面白い逸材だと思っていた。ただの人間が、彼女の言う化け物相手にスペルカードルールであるとはいえ幾つも勝ち星を上げている。何かしらの才を内に秘めていると思っていた。

それが蓋を開けてみれば単なる狂いたがりだ。その手のひねた考えは結局、自分に酔っているだけだ。こういう考え方をする輩に限って、いざ己の死に直面したとき取り乱すことが多い。

「（あなたには期待してただけだね…。悪い意味で期待外れだわ）」

「

…その考えこそ、甘かったのかもしれない。アリスは図り間違えたのだ。

魔理沙の内にある原動力が何かを

魔理沙の想いの強さを

そして…その純粋なまでの、化け物を超えたいと願う彼女の狂
暴性を

「お前は私を　殺したいか？」

レミリアは新しく淹れてもらった紅茶に角砂糖をこぼん、と3つ程入れる。少し口に含めてから顔をしかめ、また2つ投入する。

何気にカリスマがブレイクしているのだが、パチュリー達は何も言わない。この場に相応しい話題では無い、というのもあるがそれ以上…萌える。

「確かにパチエの言う通り、理屈は簡単ね。そもそも人間である魔理沙に本来あるはずのない猫耳が生えてるんだから、それ相応の負担があつて然りよね」

そんな周りの思惑を知らないレミリアは満足のいく甘さになったのか、薄く微笑む。

「そういうことよ。私が吸血鬼であるレミィに猫耳を生やす時でさえ、万が一を考えてレミィの負担を和らげる術式を組んでいるのだから、人間である魔理沙に負担を軽減する術式が組まれるのは当然だわ」

「ちよつと待ちなさいパチエ。「私に猫耳を生やした時」って私そんなことされた記憶が無いんだけど」

パチュリーと咲夜がそれぞれ「しまった…」「あ…」と漏らした。

「パ、パチュリー様、それは私と妹様達3人の秘め事ではございませんか」

「ご、ごめんなさい。失念していたわ…」

「あれ？知らないの私だけなの？ねえ、私の知らない間に貴女達で私の身体に何してるの!？」

「小悪魔の掛けた呪いには、今パチュリーが話してくれた他に、も

う1つ能力があつてね」

「紫いいいいつつ！話は後で聞くから！！お願いだから、この疑問を先に解決させてっ！！」

「まだ何かあるの？随分と器用な猫耳ね」

「……霊夢うう……」

レミリアが涙目で「うー…」と唸るがそれも皆はスルーする。見事なスルースキルである。

諦めて紅茶を啜るレミリアを余所にパチュリーの前に広げられたリボンがスキマの中に落ち、もう一つのスキマから紫の手に渡る。

「実はこの能力こそがあの娘に掛けられた呪いにおける最も重要な役割なのよ」

「役割？」

紫は「そう」と首肯してから深く溜め息を吐く。

「『心臓を止める程度の能力』：それがあの猫耳の能力よ。声を受信する能力はほとんどおまけに近い。ある一定の魔力の波長が小悪魔から伝達された時が能力起動のトリガーとなる」

「それって…」

「そう」

紫はリボンを強く握り、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「小悪魔は魔力の届く限り、いつでも魔理沙を殺す事ができるということよ」

「成る程ね…」

それまで落ち込んでいたレミリアが不意に顔を上げる。

「小悪魔がここを出て行く時、貴女があの娘に手を出せなかったのはそういうことね」

「その通りよ」

つまり小悪魔は魔理沙を人質に取ったも同然なのだ。魔理沙の命を握っている限り、紫は小悪魔に手を出すことができない。逆を言えば魔理沙が殺されれば紫は小悪魔に手を出し放題ということになる。そついう牽制を掛ける意味もあつて紫はこの場に現れたのだらう。

あの時、既に小悪魔と紫との間では戦いが始まっていたのだ。

先程の別れ際の紫と小悪魔のやり取りを思い出し、パチュリーの中で合点がいく。

「成る程ね。貴女が言ってた「先手を許した」の意味が解ったわ」

「今さら言っても仕方のないことだけれど、不覚でしたわ。言い訳をさせてもらうなら、異変を起こすのが小悪魔である以上、どうしたってあの娘が先手を取るんですけどねえ……」

紫はもう一度溜め息を吐いてから更に続ける。

「そして先程も言っただけど、この牽制の役割が小悪魔にとってかなり重要なものよ」

「どういう意味？」

「つまり……」

疑問符を浮かべるレミリア。霊夢が確認の意味も籠めて紫の説明を引き継ぐ。

「根本的な問題として小悪魔が異変を起こしたとしても力づくで阻止される事がある。それを防ぐ為に魔理沙を人質に取りこちらに牽制を掛けることで小悪魔はかなり動きやすくなる」

「そういうことよ。最初にも言っただけど小悪魔は単純な弾幕勝負や殴り合いをやらせればそこら辺の妖精や下級の妖怪程度の力しかない。だからこそ牽制の役割が重要になってくるのよ」

その異変を望む望まずに関わらず、「異変を起こす者」の立場にしてみれば全ての手を「力業」の一つで崩されては計画が破綻する。

それ以前に力づくで小悪魔自身が異変を起こせないよう密室に監禁でもされようものならその時点でゲームオーバーである。

だからこそ小悪魔は相手の「力業」を封じ尚且つ相手を同じ土俵に立たせる為に魔理沙の「命」を盾にすることで、紫達にとってもっとも有効であり手っ取り早い「力業」を封殺した。

おそらく小悪魔はこの異変の始まりを紫と霊夢に知らせる合図を考えた時から、この状況を想定していたのだろう。そうでなければ「異変開始の合図のトリガー」となった者に呪いを掛ける」という発想

はできない。さすがに呪いに掛かる者までは予測していなかっただろうが。

レミリアが顔をしかめる。

「…今さらな話だけどさ、やりにくい相手ねえ」

単純な力押しを許さない、様々な手でこちらの動きを絡め取るように封じてくる。

異変の開幕戦からして異常だ。小悪魔の放った先制攻撃は「弹幕」ではなく「牽制」の一手。それに対しての紫の手もまた「弹幕」ではなく「牽制」である。

今までの異変のように犯人が判れば弾幕ごっこで勝利して終わらせる、というような分かりやすい対処ができない。それどころか犯人が判っているのに手が出せない。

そしてレミリアとパチュリーはようやく理解する。

それこそが小悪魔の『強さ』であると。

「そろそろ解ってきた頃かしら」

狙ったようなタイミングで紫は続ける。

「何度も言うけれど単純な真正面からのぶつかり合いならば小悪魔は脅威ではない。それはいつも魔理沙に本を盗られてる貴女達ならば言わずともわかるでしょう。だけど真正面の戦いではなく彼女が用意した舞台で彼女の描いたシナリオ通りに動かされ彼女と戦った時…私達に勝ち目はない」

冷えきった紅茶を飲み干す。

そして一言一言を噛み締めるように言葉を紡いでいく。

「自分が勝てる舞台・シナリオを用意する知略と策略、シナリオ通りに役を動かさせる謀略。そして彼女の『能力』。それこそがあの娘…小悪魔の「強さ」よ。そしてラストアンサー、何故私が彼女に対して現状を打破できないのか。簡単な話よ、ここまで彼女に好きに動かさせ自由にさせたのだから当然、現状は私達にとってかなり不利になったわ」

空になったティーカップをソーサーに置く。

幻想郷の賢者である彼女の目に、今のこの状況はどのように映るのか。

「そしてここまで不利になったらさすがに私だけでは彼女の策に対応できない。だけど彼女が何を狙っているのか、おおよその予測はつくわ。だからこそ、彼女をこれ以上好きにさせない為にも協力者が必要なのよ」

「あなたは…何を言ってるの？」

自分の思考が宙に浮いているかのような錯覚にアリスは襲われる。それは今まで見知っていた物の未知なる内面：臍物を見せ付けられたような感覚。

目の前にいる少女は果たして本当に霧雨魔理沙なのだろうか。

「「何を」って、そのまんまの意味だぜ？…まあ、それだけで納得してくれるような表情じゃないな」

やれやれ、と魔理沙は溜め息を吐きながら再び帽子を頭から外す。

そして自分の頭に生えた猫耳を親指で指しながら続けた。

「質問の答えを聞くのは後回しだ。ところでアリス、この猫耳を見てください。こいつをどう思う？」

「ネタに走る時間があるならさっさと弾幕をぶちまけたいんだけど」

「ノリが悪いぜ、まあ期待してなかったけどさ。でも実際のところさ、この猫耳についてお前は既に分析済みだろ？でなければ私に「このままだと死ぬ」なんて言葉は出てこないしな」

アリスは何も言わない。

無言を貫く彼女に構わず魔理沙は続ける。

「この猫耳は魔力の糸で今回の異変の主催者サマと繋がっている。魔力の糸で人形を操る事を生業とするお前だ。今更私が言わなくても気付いてるだろ。さて、この魔力の糸。本来の役割は「私の頭ン

中に声を送る」「特定の信号を送り呪いを発動させる」「この2つが主な役割だ。けどな、この魔力の糸は魔術師である私ならではの利用法もある」

アリスは目を細めた。魔理沙が先を話す前に彼女は魔理沙がこれから話さんとすることに気付く。

「つまりその魔力の糸をあなたも利用して糸の繋がっている先：あなたの言う「主催者サマ」にあなたも何かを送るということ？」

「そういうことだ」

「成る程ね、あなたにしてはなかなか器用で利口な応用じゃない。でもそれを今話してどうするの？」

「そこで最初に戻るわけだ。お前は私を殺したいか？」

「意味がわからないわ」

「そうか。だったらこう言ったら気付くかな？」

魔理沙は喜劇の役者を演じるように、両腕を広げてみせた。

「さあて、私は今からアリスと弾幕ごっこをいたします！だけどアリスは手強いし、勝てる自信がないなー！どーしましょー！あ、そーだー！！」

魔力の糸を通じて異変の主催者サマにアリスの取って置きな攻略法を教えてもらいましょー！！

うん、そうしましょー。それがいい！これならツンデレアリスに勝てるかもー！！」

何だつて？

白々しいまでの棒読みな台詞。だがそこはどうでもいい。問題なのはそこではない。そこではないのだ。

勝てる自信が無いから攻略法を教えてもらう？

異変の主催者に？

魔力の糸を通じて？

「　　っ！？」

理解した。

それと同時に胸の内に拡がるのは嫌悪感だ。

猫耳を通じて異変の主犯者から「アリスの攻略法を教わる」ということはそれだけ魔理沙の脳に負担を掛けるということ。ましてや一言二言で終わるような内容ではない。彼女の脳に掛かる負担は相当なものになるだろう。下手をすれば死に至ることは明白である。

「（理解したか？だから聞いたんだよ、「お前は私を殺したいか」ってね）」

「（私と弾幕ごっこをするならば魔理沙は私を攻略するために異変の主犯者から私に対する攻略法を聞き出すと言った。それは詰まるどころ『私が魔理沙と弾幕ごっこをする』魔理沙の死』と変わらない。成る程ね、それでさっきの質問に繋がるわけか）」

魔理沙とアリスが弾幕勝負をすれば魔理沙は死ぬ。強引な考え方をすればアリスが魔理沙を殺すのと同義になる。

成る程、確かにアリスは魔理沙を殺したくはない。魔理沙はそれを見越して、アリスがこの戦いを降りると踐んでいるのだろう。

「だけどね、やっぱり甘いわ」

随分と安く見られたものだ。

確かにアリスは魔理沙を殺したくはない。だがそれは『できることならば』である。

やむを得ず魔理沙を殺すことになったとき、アリスにはそれができ

るし、その覚悟もある。この程度のことでは勝負を降りる気は毛頭無い。

「今のあんたを前に私が退く理由はないわ。あなたのその程度の策でこの場を乗り切れると思わないで」

アリスの手に魔力が集約する。魔理沙の策は看破した。彼女にはもう、小手先の小細工もできないだろう。となれば、後はいつも通りだ。真正面からの弾幕の撃ち合いである。

「小細工無しで正面から来なさいな。そうすればまだ勝ち筋が見えるかもよ？」

「誰がお前に「私を殺せるか」を聞いたよ」

「…ああ？」

この期に及んで何を言っているのだ、この白黒は。

「何？まだ小細工の種でもあるの？」

「阿呆が、小細工の「こ」の字もネエよ。私はさっきからこう聞いてるだろ？「お前は私を殺したいか？」って。お前が私を殺せるか否かなんて最初から疑問に思ってたネエよ」

アリスの胸の内に再び疑問が浮かぶ。それは最初に感じた魔理沙への、恐怖にも似た気持ちの悪い感覚。あの感覚の正体を彼女はまだ掴んでいない。

「…あなたを「殺したいか否か」の質問だとしても、私のやることは変わらないわ。正直言ったら殺したくは無いけれど、「やむ無し」と言っただころね」

「妥協したな」

「え？」

魔理沙は笑う。

「妥協したな」

二度、続けた。

「お前曰く「小娘」の戯れ言にお前は耳を傾けた。聞き流すことも

せず、その言葉を論破することもなく。お前は私の土俵に立った」

「……だから？それが何だと言うの？」

「解らないか？ここが境界線だったんだよ。私とお前の、勝負を決する境目。お前は今この瞬間、私の領域に両足が地に付いた。こうなったらお前は私に何かを喪わずに勝つことはできないぜ？」

「何を」

「スペルカードを用いた弾幕勝負における最重要ルール……『対戦相手を殺してはならない』」

「……っ！？」

まさか……

アリスの中で一つの予感が浮かぶ。
そして思う。

そんなことに命を棄てるのか？

スペルカードルールの大前提とも言えるルール。それは故意の殺生は禁止であるということ。

「お前が私に対して「異変の解決」の為に勝負を挑んでいる以上、私達は幻想郷のルールに則ってスペルカードルールで戦わなければならない。そしてそのスペルカードルールが「殺し」を禁じている以上、お前は私が死なないよう考慮して戦うことになる」

魔理沙は「異変の主犯からアリスの攻略法を教えてもらう」ことを公言した。そしてアリスは魔理沙がそれをすれば死に直結することを知っている。その上で魔理沙が弾幕勝負の最中に呪いで死ねば過失側はアリスになってしまう。

「もう薄々は気付いてるだろ？ツンデレでお人好しのお前はただ単に「私を殺す覚悟」をするだけだと思っっているかも知れないがな、実はその覚悟には「幻想郷の禁忌タブーに触れる覚悟」も伴わなければな

らない。いかにお前でもそこまでのリスクは背負えないだろ？ただどなあ、私はお前を逃がすつもりは毛頭無い」

その表情に笑顔を張りつけながら、魔理沙の鋭い視線がアリスを射抜いた。

アリスは己の見込みの甘さを呪う。

リスクを回避することを考えたならばアリスはこの戦いを降りるのが一番良い。ここで魔理沙を見逃すのがベターなのだ。しかし、計り間違えた。霧雨魔理沙を嘗めていた。

アリスは魔理沙がこの戦いを避けるために、こんな戯れ言を言っているものだと思っていた。彼女が命を張って弾幕勝負を受けると言った時も、アリスはそれを戦いを避けるための詭弁、はったりと切り捨てた。だが違う。魔理沙の本当の狙いはそこでは無かった。

魔理沙の本当の狙い、それは戦いを避けようとする魔理沙に追い討ちを掛けるアリスを迎撃すること

魔理沙は人差し指を立てる。

「お前が私の命を考慮して短期決戦で来るなら私は長期戦で迎え撃つ。総合火力は私の方が上だからな。お前が短期で勝負を終わらせようとしても私の火力はそれを許さない。結果的に異変の主催者サマから声を受け取り続けた私は死んで、お前は幻想郷の禁忌を犯すそれが嫌なら逃げても良いぜ？プライドの高いお前が逃げるのもそれはそれで面白いしな。けどさっき言った通り私はお前を逃がさない。今度は私からお前に挑もうか。『異変成功の障害と見なしお前に弾幕勝負を挑む』という大義名分はあるしな。そうなれば振り出した」

人差し指を立てていた手は握られ、親指を下にする。

「どちらであっても変わらない。私は私の命を代償にお前の名誉を地に墮とす。見込みが甘かったな、アリス・マーガトロイド。ヒントは与えてやったぜ？」

こいつ…

アリスは齒嚙みする。

確かに魔理沙の言う通り、手掛かりはあったのだ。

最初の質問からしてそうだ。本来なら弾幕ごっこに生死の話題は必要ない。何故なら対戦相手を殺さないことが大前提である以上、余程不幸の事故でも無い限り死者は一切出ない筈なのだ。にも関わらず「殺したいか？」と聞いてきたということは最終的に論点をそこに持つてくることは目に見えている。それをアリスは「気をてらった浅い悪知恵」程度にしか考えなかった。故にアリスは深追いをした結果、こうして返り討ちにあっている。

『死ぬのは怖いぜ？それは先刻私が言った通りだ。だけどなあ、それ以上に私はお前達に勝ちたいんだよ。そしてこの気持ちの原動力こそ、お前達化け物が精神面では私を超えられない要因だ』

『お前達は気分屋だがそれ以上に利己的だ。故にお前らの原動力には常に損得が絡む。故にお前達は私には勝てない』

魔理沙の言葉がアリスの中で反芻される。その言葉の意味が今ならよくわかる。

魔理沙は己の利、命すら投げ棄てた。

アリスは異変の早期解決という利を追求し、魔理沙を深追いした。その結果がこれである。

損得を度外視し、捨て身の『アリスに一矢報いる』為に特化した魔理沙の「策」とも言えないような策が利を追求したアリスを上回ったのだ。

「さあて、時間も無いしな。始めるか？私は何時でも良いぜ？」

「っ……………」

追い詰められるアリス。
アリスの頭の中で様々な考えが浮かんでは消えていく。活路が形を成さない。

いつそ魔理沙を殺す？ごめんだわ。禁忌に触れるのも、勝負から逃げるのも糞食らえ。そんなの私のプライドが許さない。そんな考えは端っから溝に捨てた

ならどうすれば良い？どうすればこの状況を脱することが出来る？

どうすればいい？

どうすれば……！

「双方、そこまで。この戦いは中止よ」

幼い少女の声が響く。

この殺気だった空気にはそぐわない、年端もいかない少女の声。

「あなたは」

「八雲のとこの式の式か？どうしたんだよ、こんなところで」

ロリに猫耳という、今の魔理沙にも負けず劣らず凶悪な武器を備えた少女　橙がそこにいた。

彼女はこほんと咳払いをする。

「藍様の命令で来てるのよ。あの人がアリスさんにはやってもらうことがあるし、魔理沙には死なれちゃ困るんだってさ。これ以上の戦いはたとえあたしが許しても藍様が許さないわ」

「いや、お前が許しちゃダメだろ」

「だってあんたら相手に力ずくなんて通用すると思う?」

「そうだけどさあ……」

間抜けなやり取りをする魔理沙と橙を余所にアリスは溜め息を吐く。橙が来たお陰で空気が変わったのはアリスにとっては救いだ。しかし、問題は解決されていない。

橙の言う通り、今なら魔理沙は己の命を棄てる必要があるとはいえ、アリスに勝つことが出来るのだ。そんな魔理沙が、あっさりこの勝負から手を引くなんてこと

「ま、いつか。今回は引き分けということで」

「……………あんだと?」

引きやがった、それもあっさりと。何だそれは。何なんだそれは。

「アリス、お前さあ。たまにすごく口が悪くなるよな」

「んなこたあどうでもいいわよ。あんだ、何でもまたこんなあっさりと」

「何でもって、勝てる見込みが無いからだろ」

「はあ?」

魔理沙は「やれやれ」と溜め息を吐く。

「少しは冷静になれよ。私がお前に話したことをよく分析してみな」

「分析?」

「私の話したお前に勝てる理論は8割方破綻してるんだよ」

……………あ

少し考えて…気付いた。

アリスは愕然とする。

こんな…こんな簡単な理論の穴に気付けないなんて!!

魔理沙は話始める。

「私がお前に「スペルカードルールの禁忌に触れさせる」つつたつて、逆を言えば私もスペルカードルールの強要させられる。つまり弾幕が一発でも当たれば私は負けを認めなきゃいけないし、そうでもなければお前がわざとスペルカードの弾幕を外してスペルブレイクしてから自分から負けるといふ選択肢だつてある。そうなればお前はスペルカードルールでは負けることになるが「私を殺す」といふ最大の禁忌に触れなくてすむ。ようするにだ、お前は普通にいつも通りの弾幕ごっこをやれば良かったんだよ」

命を掛けてまで育ててきた理論を魔理沙は次々と破壊していく。そして最後に止めを刺した。

「そもそも私が脳の負担で死ぬことになっても、それがアリスの責任になるのは筋違いだろ」

「今更それを言う!？」

確かにちよつと強引な考えだなとは思っていたけど。思っていたけれども!!

アリスは額に手を当てる。

「あなたね…それで私が「死ぬのはあんたの勝手」とか言ったらどうするつもりだったのよ」

「それはあり得ないよ。他者に興味の無いお人好しのお前が私がこんなことで死ぬのを黙って見過ごしたりは出来ないしな」

さすがこういったところは抜け目が無い。そういう風に分析されているのが腹立たしくはあるものの、当たっているのは確かだ。

橙は腰に両手を当てる。

「2人とも、おしゃべりはそこまでにしてよ。アリスさんを早く藍様の所に連れていってから、私はマタビが欲しいのに」

「はいよ。そんじゃあ2人とも、私はこれで失礼するぜ。おっと、その前に…」

魔理沙はスカートのポケットから何かを取り出し、アリスに向けて投げる。受け取ったアリスは手の中のそれを見て眉をひそめた。

「何これ…霊夢？」

それは何とも形容し難い物体だった。饅頭のような形をした霊夢の生首。やけに自信満々な表情がム力つく。

「即興で作ったんだよ。お腹の方を押してみ？」

果たして生首に「腹」等と言うものが存在するのか、甚だ疑問に感じるが栓無きこと。アリスは素直に親指でそれをぶにと押してみる。

『ゆっくりしていつてね！！！』

しゃべった。

「……………」

「止めてくださいアリスさんそんなメジャーリーガーもびっくりな形の良いフォームで投げようとしなくてくださいそれ作るの結構大変なんですからマジ勘弁してください！！」

アリスはフォームを解いて手の中のそれを見詰めた後、魔理沙にジト目を向ける。

「何これ」

「中々にかわいいだろ」

「これがかわいく見えたら末期だと思うわ。そうじゃなくて、これ何のためにこんな作ったのよ」

魔理沙はニヤリと笑う。

ふざけた見た目に似合わず、かなり高度な魔法の術式が組まれている。軽く目を通すだけでも穏やかではない効力を発揮することはすぐに解る。

「橙に藍の所まで連れていつてもらったら、あいつに見せてみればいいよ。あいつならすぐにその意味が解るさ」

「狐に？」

「そ。お前の術式の解説と合わせればすぐに済むさ。それは異変を解決しようとする者にとって毒にも薬にもなる」

このふざけた生首が？

アリスはもう一度手の中のそれを見詰めた。あ、やばい。投げたくなっちゃう。

「止めてよっ！？」

「あら。あなたはいつから覚り妖怪になったのかしら」

魔理沙は「このやろー…」と呟き涙目で睨み付ける。

「とにかくそれはお前らにとって重要アイテムだからな。捨てんなよ！」

魔理沙はそう言っアリスの横を通り過ぎていく。アリスは魔理沙の方を向いた。

「魔理沙」

「ん？何だ？」

「今回は私の負けよ。だけどあなた、こんなことで命を掛けてたら命が幾つあっても足りやしないわ。こんなことで無駄死にしたらどうするつもり？」

それはアリスなりの忠告なのだろう。

魔理沙はしばらくの間無言だった。

風が吹く。彼女の金髪が風に靡いた。

「死とは本来そこで終わりであり未知のものである。お前がさっき言ったことだ」

振り返る。いつもの魔理沙には、不釣り合いな無表情だった。

「無駄死にしてどうするもこうするもないだろ？」

その言葉を最後に魔理沙は去っていく。後にはアリスと橙だけが残った。

アリスはまた溜め息を吐く。

「確かに、正論だけど…さ」

「死にたがりにはそう言わせとけばいいわよ。自分の命をまともに管理できない奴は程度が知れてるわ」

「それもまた正論ね」

アリスは橙の方を向いた。

「それじゃ、あなたのご主人様の所に連れていってもらおうかしら」

「はい。行き先は博麗神社だから、そう時間は掛からないわ」

「…霊夢の所に？」

「うん。もつとも今、あそこの巫女は留守にしてるけどね」

「……………」

藍が博麗神社にいて霊夢が留守。既にこの異変に気付いて動いているということか。藍や橙がこうしているということはその主人である隙間妖怪も動いているはず。

今まではまだ曖昧だったが、魔理沙や橙の話を聞いて「異変が起きている」という自分の勘が当たっていることをアリスは確信する。

「（まだまだ油断ならないわね…）」

異変に対しての情報が少ない。できることなら藍に詳しく聞きたいところだが主人に似てあの狐もかなり癖が強い。

下手をすれば先程の二の舞になる。

アリスは気を引き締めて、一人で先に行く橙の後を追った。

第6話 解れ絡まる意図の束

私はその願いに、どれだけの祈りを捧げて裏切られてきたんだろう。どれだけの証明を書き綴っても、その先にある解は私の望む未来じやなかった。

だから私は諦めたんだ。

だけど私は、私が願った未来を捨てて尚、私は私を裏切っていく。ならば私は、私を殺す。

だけど私は、私を殺せない。

だから私は、私がない未来を描く。

緩かな自殺を夢見て、道化を演じ最期の大舞台を用意する。

私が描く未来に、私はいない。

いないんだ。

「滅べおっぱいいいいい！！」

「あつぶなあつつ！！？」

小悪魔の翼から放たれるレーザーが美鈴のたゆんだゆんな胸の僅か数センチ上を通過する。後少しずれていれば衣服だけに直撃してそれなりの……いや、かなりのムフフな絵になるのだが。

さすがは中国、空気を読まない。

「なんだか理不尽なクレームが来た気がする！」

「さすがは中国、空気を読まない」

「気のせいであって欲しかったなあ！」

涙目になりながらも美鈴は色とりどりの弾幕を数十発、小悪魔に向けて放つ。それら全ての弾幕を、小悪魔が弾幕で一発ずつ相殺する。美鈴の顔がひきつった。

「…つつそだ…」

一度や二度だけではない。こちらの放つ弾幕が全て、彼女の弾幕で相殺されている。確かに数はそう多い訳ではないがそれにしたって弾幕を一発ずつ寸分違わず弾幕で撃ち落とす技術は神業と言える。もつとも呑気に感心していられる場合でもないのだが。

小悪魔の戦い方が変わった。先程までは翼から放たれるレーザーで美鈴の動きを牽制しつつ、弾幕で少しずつダメージを与えていく守備型の戦闘スタイルから一転。

翼から放たれるレーザーで執拗なまでに追い回し、美鈴からの威嚇の弾幕を全て弾幕で撃ち落としシャットアウトするという超攻撃的な戦闘スタイルになっている。

美鈴は顔をしかめる。計算がずれた。

当初の予定では小悪魔の決め手を絶ち、彼女が攻め急ぎ守りが手薄になったところを一気に間合いを詰めて美鈴お得意の接近戦で撃破する、というものだったのだが…。

「（決め手を封じられたら新しい手で攻めてくるって…！）ただ器用なのよ！！」

何なんだこの勇者が魔王を倒したら第2、第3の魔王が出てくる的な展開は。

ピンポイントで読んで弾幕を数発撃ち込む戦法から読みを絡めてレーザーの手数で攻めていく戦法に切り替えた。

完全な予想外である。

威力やリーチはあれど攻撃の軌道が直線的でレーザーそのものが細いというのは弾幕勝負に使用される弾幕としては完全な欠陥だ。故にこの手の弾幕の主な役割はその威力とリーチを活かした相手の動きの牽制なのだ。

魔理沙のような『マスタースパーク』クラスの極太レーザーでなければレーザーは攻撃としては到底使用できる物ではない。

しかし小悪魔はそのレーザーを、魔理沙とは違う利点を活かして攻撃に使用していた。魔理沙のレーザーが広範囲、高威力で相手を火

力で圧すのに対し、小悪魔はその可動範囲で相手を追い回し追撃する。

小悪魔の頭、背中から2対ずつ生えた翼から放たれるレーザーはそれぞれ3本ずつの計12本。それらのレーザーが全て独立して動き、可動範囲が広いため如何に細く軌道が直線的なレーザーと言えども避けるのは容易ではない。

極めつけは彼女が先程まで攻撃の主力として使用していた弹幕だ。美鈴の放つ弹幕を片っ端からあの弹幕で迎撃され、攻撃が一切届かない。

現状、小悪魔に試合の主導権を完全に奪われた。

しかし、美鈴にとって一番の問題はそこではない。確かに現状、一方的な試合展開を握っているのは小悪魔だ。しかし、美鈴にだって手が無いわけではない。奇しくも美鈴には先程までの小悪魔のように「不意打ち」という手が残されているのだ。頭の回転の早い小悪魔もそれに気付いているだろうが彼女の時とは違い、美鈴には決定的力がある。小悪魔は美鈴が不意打ちをしてくることが解つていてもそれを止められなければあっさりと逆転を許してしまう。そうなるかとは予定調和だ。

小悪魔は如何に隙を見せず美鈴の体力を削りきるか。

美鈴は如何に小悪魔の隙を作るか。

「（結局のところ長期戦であることに変わりはない。そして小悪魔さんは長期戦では体力的に考えると私に不利であることにも変わりはない。試合の主導権を握られはしたけど根本的な問題を彼女はまだ解決出来てないんだ）」

このままで行けば美鈴の勝利は揺らがない。もっともそれはこのままで行けばの話だが。美鈴にとっての問題はここからだ。

小悪魔が何をしでかすのかわからない。

小悪魔は先刻、美鈴に対し「私は賭博師ではない」と言った。成る

程、確かに今の小悪魔の戦い方はギャンブルとは対極の堅実な戦い方だろう。しかし、このままだと小悪魔の敗北であることに変わりはない。それが却って、美鈴には小悪魔の言ったこの言葉の裏に自分が思っている以上の何かがあるような気がしてならない。杞憂であって欲しいとは思うが、ここはまだ何かあると想定して動くのが吉か。

「（油断ならないわね、まったく）」

再度弾幕を撃ち込む。

小悪魔はそれをまた全て弾幕で打ち消す。相変わらず見事なまでの弾幕の制動能力と弾幕の動きと軌道を見極める動体視力である。

「（…いや、あれはどちらかというと私の弾幕を見て狙ってるんじゃないかって私の弾幕の軌道を読んで狙ってるわね）」

試しにもう一度数発の弾幕を撃ち込む。避けた。

「何で避けちゃうの!？」

「どう考えても今のは試し撃ちでしょう。知られて困る情報じゃないですけど、知られて得になることもないなら隠蔽させてもらいますよ」

「な、何でそんなことが解るんですか」

「リズムがおかしい。貴女が私に弾幕を撃つ時はむやみやたらに撃つんじゃないって私のペースを崩そうとする時、即ち私が見せた一瞬の隙を拡大させようとする時に弾幕を撃ちますからね。今の弾幕は私の体勢が整っている時に撃たれましたから、「貴女がタイミングを読み間違えた」と考えるよりは「貴女が私から何らかの情報を引き出す為の試し撃ち」と考えた方が妥当でしょう?」

「…うわー」

全部当たってるし。

そしてこれで確定した。小悪魔はやはり美鈴が現状を打破する手段に「不意打ち」があるということに気付いている。そうでなければ美鈴の弾幕を撃つタイミングをわざわざ「隙を拡大させる為」とは言わないだろう。

「嫌らしいぐらいに読みも頭の回転も早くて正確ですね。それくらいの情報、教えてくれても良いじゃないですか、けち」

「教えなくたってほとんど確信してるじゃないですか。どうせ私が貴女の弾幕を迎撃してる時、貴女の弾幕を見ないで貴女の弾幕の軌道を読んで狙いを定めてるんじゃないか、とかそんなこと考えてるんじゃないですか？」

「……………」

凶星である。ここまで当たりだとすごいとか通り越して気味が悪くなってくる。

「…何でそんなに当たるんですかね。私ってそんなにわかりやすいかなあ」

「というよりは貴女の観察力の高さを逆に利用してるだけです。私は貴女の放った弾幕を迎撃する時も隙を見せないために常に貴女に目を向けている。そして貴女も随時、私の隙を突こうと私の動きを見続けているから、私が弾幕を見ないで弾幕を迎撃していることに当然気付く。そうなれば貴女がそこに疑問を抱くのは必然です」

美鈴は苦笑する。

まるで自分の考えてること全てが掌握されてるかのような感覚。不快でないとええ嘘になる。しかし、それ以上に

「（敵に回したら厄介。それは裏を反せば味方ならすごく心強い）」
やっぱり小悪魔には、紅魔館（ニジ）に居て欲しい。今、改めてそう思った。彼女には、あの図書館が パチュリーの隣が似合ってる。

ここらで勝負に出ましようか！

美鈴は小悪魔を見据えた。

先程の話から察するにやはり小悪魔は弾幕を見ず美鈴だけに集中している。向かってくる弾幕の迎撃には脅威の読みを駆使しているのだろう。

ここで重要なのは小悪魔が美鈴を集中して見ていること。それはこ

の戦いの美鈴の勝ち筋が不意打ちであることに気付いているから。ずっと目を離さないのは僅な隙も見せないためだろう。

だが逆に、この状況は利用できる。

気を集中させる。
呼吸を整え、身体の中で刻むリズムのイメージを少しずつ早めていく。

全身の『気』の流れを掴む。少しずつ感覚を研ぎ澄ます。己の知覚できる範囲が広がるのに伴い、世界が広くなった感覚を覚える。

そして

「小悪魔さん！」

「何ですか？」

「行きますよ　！」

「……っ！？」

急激に加速した。

小悪魔の目が加速した美鈴に追いつかない。美鈴は一瞬で小悪魔の放つレーザーを掻い潜り、そのまま小悪魔の背後に回る。

気付いた時には手遅れだった。

「こいつ　っ！」

「堕ちなさい」

ドゴオオオツツ！！

美鈴の斜め上から降り下ろされた蹴りが、咄嗟に振り返った小悪魔の腕のガードごと打ち抜いた。

庭に蹴り落とされ、そのまま庭の下にある地下まで落ちていく小悪魔。凄まじい音が辺り一帯に響き、小悪魔が落下した庭に大きな穴

が空いた。瓦礫と煙で小悪魔の姿は視認出来ない。

「…ここまで上手くいくとは思わなかったわね…」
ちよつとした裏技だ。

長期戦が不利とはいえ、小悪魔が何をしでかすのかわからない以上、美鈴はどうしても小悪魔が動く前に決着を付けたかった。

その為には不意打ちを何がなんでも成功させたい。しかし緩い手ではすぐに看破されてしまう。

ではどうするか？

簡単な話だ、小悪魔を不意打ちに対処出来ない状態にすればいい。美鈴は先程からずっと一定の動き、一定の速さで動いていた。そして自分の能力を駆使し、意識を集中してから一気に動きを加速させる。

今まで一定の動き、速さで動いていた美鈴が急激に動きを変え、加速すれば当然小悪魔の対応は遅れる。それはさながらスローモーションで見せられていた映像をいきなり3倍速にされ目が追い付かないのと同じように、小悪魔の目は急加速した美鈴の動きに対応出来なかったのだ。

その一瞬の隙を逃さない。

小悪魔の目が美鈴の速さに追いつかない内に美鈴は難関だった小悪魔のレーザーを掻い潜り、接近戦に持ち込んだ。そして高威力の蹴りを見舞う。

途中から小悪魔も美鈴の狙いに気付いたが一步遅かった。しかし、気付けた事がこちらに災いした。おそらく、止めを刺しきれていない。

もともと威力の高い蹴りに加え庭を貫通して地下まで落ちていったのだ。小悪魔の受けたダメージはかなり大きいだろう。

しかし、どうにも腑に落ちない。

「（私の蹴りをガードまでして受け止めた。あの状況でそこまで出来るのは流石と言えるけど…あそこまで対応出来ていてどうして受身にまで気が回らないの？）」

先程の状況を思い返す。

美鈴の蹴りを受け止める時、小悪魔は体の向きと翼の位置を瞬時に微調整していた。あれは美鈴の蹴りの威力をガードごと打ち抜けると見抜いた小悪魔が蹴りを受け止める事を諦め、受け流す事にしたから。体の向きと翼の位置の微調整は蹴り飛ばされる方向を定めるためだろう。

しかし、何故この方向に飛ばされる事を選んだのかわからない。すぐ近くに大きさも深さもそれなりにある泉だつてあるのだ。そこに落ちた方が明らかにダメージは少ない。

「（ここに落ちることが小悪魔の狙い？だとしたら何を狙っているの？）」

まだまだ油断できない。

能力で小悪魔の『気』を探し、彼女の位置を把握しようとする。

小悪魔が落ちた地点のすぐ近くに着地した。

と、同時に美鈴を中心に魔方陣が広がる。

「　　っ！！？」

直感的にやばいと感じ取った美鈴は即座に魔方陣から離れる。それからコンマ数秒遅れて12本のレーザーが魔方陣から放射される。

その光景を美鈴は冷や汗を流して眺めた。

「（…危なかったあっ！反応があと少し遅れてたら蜂の巣になるとこだった）」

魔方陣が徐々に薄れていく。そして直後、魔方陣の描かれていた場所が爆発する。

新しく庭に作られた穴から瓦礫を掻き分け、小悪魔が這い出てきた。出血はしていないが丁寧に仕立てられた黒い司書服はあちこちが破け、解れている。そして左腕がぶらりと垂れ下がっていた。

「あらま、脱臼しちゃいましたか」

「誰のせいですか、誰の！」

小悪魔はそう言つて美鈴を睨みながら右手で左肩を抑え、無理やり嵌め込む。

「んっ…！」

嫌な音が辺りに鈍く響くが美鈴は聞き慣れた様子。対する小悪魔は慣れない激痛に顔をしかめた。

「いったあぁッ」

「治し方、下手ですね」

「だから誰のせいですか、誰の！！基本的にインドアなんだから仕方ないでしょうよ」

「でしたら回れ右を」

「却下だ」

左腕の動きをチェックし、左手を握つては開いて腱の無事確かめる。動かす度に激痛が走った。まだ上手くはまっていけないのかもしれない。

このままでは外れ癖が付いてしまうが、そこはまあ、魔力で何とかすれば大丈夫か。

少なくともこの戦いで左腕は使わないのが無難か。

「…それにしても詰めが甘いですね。追い討ちでもして止めを刺すチャンスはあつたでしょうに」

「殺したいわけではありませんから。戦闘不能にするだけで充分ですよ」

「だとしても不合格」

小悪魔はばつさりと切り捨てる。羽を動かし異常がないか確かめる。

「相手を生かしたまま戦闘不能にしたいのなら、四肢をへし折るぐらいのことはしなくちゃね？」

「発想が穏やかじゃないですね」

「何言つてんですか。言葉のやり取りを放棄したんだから、こうなることもわかつてたでしょうに。…ま、何だつていいんですけどね。何だつて」

そう言つて小悪魔は腰に手を当て、月夜に照らされた時計台を見上

げる。戦いが始まってからかれこれ30分。感覚的には1時間以上戦っている気分なのだが。
小悪魔は目を細めた。

そろそろか

美鈴の方に向き直る。

美鈴を視界に納め、思考を開始。

あの時、戦いの流れは完全に長期戦だった。それもそのまま長引けばいずれ小悪魔が押されるであろう、小悪魔にとっては不利な流れにも関わらず、美鈴はその戦いの流れを断ち切ってまで、小細工までして小悪魔に勝負を仕掛けてきた。

何故か？

答えは簡単、美鈴が長期戦を望んでいないから。

何故美鈴に有利な長期戦を望まなかったのかと言えばそれは小悪魔に時間を与えたくなかったからだろう。

「（成る程ね、どうやら私の言葉が相当効いてるらしい）」

内心ほくそ笑む。強ちブラフとも言い切れないから警戒するのが正解と言えるか。

「（長期戦を凌ぐ手も無いわけじゃないけれど、リスクも大きいし。そちらがさんが退いてくれるなら大歓迎、喜んで短期戦に乗ってやるさ）」

向こうが短期戦を望んでいるのなら利害は一致する。つまりこちらから勝負を仕掛けた時、あちらは凌ぐ事はせず返り討ちにしてくるだろう。

こちらとしてはその方がありがたい。逃げられるのが一番辛いのだ。

「（さて）」

考え始めてからおよそ3秒で手を考案し行動の指針を決定。一歩踏み出す。

「（踊りましょうか！！）」

そして、駆け出した。

互いの距離は約25メートル、その差を一気に詰めた。

これには少なからず美鈴は驚く。

あれだけ接近戦を嫌っておいてこの局面で敢えてそれをやるということは、勝負を決めにきたということか。

気を取り直し、即座に迎撃体勢をとる。そこは流石と言ったところか。

小悪魔は両手の爪に魔力を籠める。

「もげるおっぱいいい！！」

「ちよつと待ったあああ！！？」

魔力の他妬み怨みもセットで籠められた爪が美鈴のばいんばいんな胸の僅か数センチ上を通過する。後少しずれていれば衣服だけが裂かれそれなりの……いや、かなりのえっちい絵になるのだが。

みりんちゃんマジ外道。

「そこまで言いますかっ！？」

「当然じゃないですか」

「貴女もさつきから私の胸に理不尽な妬み抱えてますけど！貴女の胸だつてそんなに言うほど小さくないでしょう！！」

「黙らっしゃい！！言うほど小さくないけど言うほどでかくもないんです！！貧乳からも巨乳からも見放され「無個性」の烙印を押された胸を持つ私のこの苦しみがわかるまい！！」

血の涙を流し吼える小悪魔に美鈴は思わず威圧される。それでも彼女は弱々しくも励ましの意味も籠めて反論した。

「でも……大きいと肩凝り大変ですよ？」

「私も胸の重さで肩凝りたいなああああっ！！」

「ひいつ」

逆効果だった。

小悪魔の猛攻が始まる。

彼女の素早さと至近距離からの弾幕が、圧倒的手数となって美鈴を攻め立てる。

小悪魔としてはテンションを高くして、強気に攻めるだけのつもりだったのだが…胸のことを割と本気で気にしていた。

だからこそ美鈴は圧される。『気』を操る美鈴だからこそ、心の内から洩れ出る妬み怨みを原動力に戦っている小悪魔の気迫に圧される。

一時のハイテンションに身を任せて適当に攻めているだけであれば、美鈴はここまで圧されていなかっただろう。

さすがにここまで意図したわけではないが、この攻めと気迫が結果的に美鈴の動きを鈍らせた。

いつもであれば絶対にしないミス在美鈴はしてしまう。

足下に放たれた弾幕を美鈴はバックステップでかわす。その時、彼女は両足を揃えて着地するという初歩的な、それでいて致命的なミスを犯す。しまった、と思うときには遅かった。小悪魔はそのミスを見逃さない。

着地した直後、即座に小悪魔は美鈴の両足を払う。尻餅をついてしまふ美鈴だがすぐに体勢を立て直す。体のバネだけで立ち上がり、そのまま勢いで小悪魔から距離を取ろうとする。が、小悪魔の方が早かった。

強大な『気』を感じる。

小悪魔の4枚の翼が眩い光を放っていた。

「（や……ばいっ！！）」

レーザーの零距离射撃。

追い討ちの体勢は既に整っていた。

少しでも距離を取ろうとする。しかし間に合わない。

殺られる……！！

その時、小悪魔は何か気付く。頭の中で警笛が鳴り響いた。明確な理屈の無い、長年の戦いの中で培われた『勘』が「危ない」と告げる。

「　　っ！？」

攻撃体勢を強制終了。美鈴とは反対方向に、全身のバネと翼を駆使して跳んだ。

その直後だった。

ズドオオオオオツ！！

2人の目の前で凄まじい爆音と共に火柱が発つ。

その衝撃が、小悪魔と美鈴を吹き飛ばした。

体勢をなんとか立て直し、着地する。2人の距離はかなり離れ、その2人の真ん中で火柱が燃え盛る。

「（まさか）」

その光景を目の当たりにし、美鈴の中で一つの予感が起きる。

そんなバカな。

しかし、確かにいてもおかしくはない。

何故なら小悪魔を庭に叩き落とした時、小悪魔は庭を破りその地下まで落ちたのだから。

「何やってんのさ、あんたたち」

不機嫌な声が響く。

それと同時に火柱が消えた。庭にできたクレーターのような窪みの真ん中に刺さっているのは、槍とも杖とも形容し難い棒状の何か。間違いない、あれは

小悪魔と美鈴は声のする方へ向く。

血のような赤い服。

血のような深紅の瞳。

サイドで纏められた黄金の髪。

そして、月下で七色に耀く宝石のような歪んだ翼。

「これだけドンパチやらかshいてお姉様は絶賛放置プレイですか。
だったらわたしがあなたたちをお姉様の代わりにしばいちゃっても
問題無いよね」

悪魔の妹 フランドール・スカーレットは艶然と、怒りを内に込めた笑みを浮かべる。

「さあて、聞きましょうか。あなたたちはコンティニュー、したいですか？」

月光に晒され、月を背にして空に浮く悪魔の妹を見て、小悪魔は一言呟いた。

……
揃った

第7話　そして誰がいなくなるのか？

面倒臭いことになった。

紫から大方な説明を聞き終えたレミリアの感想はまずそれだった。簡潔に現状を説明するならば魔理沙が小悪魔に事実上、人質にされているため小悪魔に手が出せない。

この状況を打破するのに手っ取り早い方法は「魔理沙に人質としての価値を失わせる」こと。

即ち「魔理沙を見棄てる」か「魔理沙を解放」するかのほぼ二択に絞られる。

しかし、前者は論外。後者は魔理沙の生殺与奪を握っている小悪魔相手に魔理沙の解放は極めて困難ということから現実的ではない。そうになると「手っ取り早く現状を打破する」という「考え」自体を改めることになる。

現在求められているのはいかに「魔理沙という此方こちらのウィークポイントを彼方あちらに突かせず」「小悪魔の策略を掻い潜って彼女のウィークポイントを突く」か。

そうなるとレミリアとしてはお手上げである。

見た目不相応の年月を生きている彼女も、見た目相応に小難しいことを考えることは面倒なのだ。

「（小細工は面倒。かといって力業で解決するならばどうしても小細工が必要になる。これだと本末転倒もいいところだわ）」

見事なまでに状況が噛み合わない。

どうあっても小細工抜きにはこの先やっていけそうにない。だとしてもレミリアは小細工は苦手なのだ。

…となれば、結論は一つ。

「で？ 結局のところ小悪魔を連れ戻すにはどうすれば良いわけ？」
餅は餅屋、である。

パチュリーがレミリアにじと目を向ける。

「…貴女がこういうややこしいのを考えるのが苦手なのは知ってるけどね…もう少し知恵を絞りなさいよ」

「それは私の領分じゃないよ。それなりに思うところはあるけどね。経済学者が説く浅い知識で組み上げた量子力学論を聴いたところで時間の無駄遣いにしかないでしょ？」

「…どうしたのよ、随分謙虚じゃない」

「謙虚なんじゃなくて身の程を弁えているだけ。今回の件での私の役割はいざというときの小悪魔への武力行使。畑が違うわ」

「…その役割も危ういですわねえ…」

「…は？」

溜め息混じりに呟いた紫の言葉にレミリアとパチュリーが目を見くする。

「どういうこと？」

「貴女だけじゃないわ。私も、私の式も…いえ、下手をすればこの幻想郷にいるほとんどの強者が今回の異変には参加できないわ。彼女の能力のせいだね」

「『能力』？そういうえばさつきもさりとってたけど、小悪魔に能力なんてあったの？」

「ちよつと待つてよ。紫、あんたあいつの能力まだ説明してなかったの？最重要事項でしょ、これ」

「それを教えるにしても状況が把握できていた方が説明しやすいじゃない」

霊夢の言葉を軽く流しながら紫は紅茶を口に運ぶ。頭の中を整理するために飲んでいた紅茶なのだが、今では割とお気に入りらしい。先程よりも飲むペースが上がっている。

「まあ、忘れていたのもあるのだけど」

「認知症？」

「何言ってるのよ。認知症に陥るほど年食ってないわよ」

『……………』

世界を無音が支配した。

気配さえ葬り去る重い沈黙が辺りの空気を蹂躪する。

「ごめんなさい。お願いですから妙な間を置いて沈黙するのやめてください」

涙目で懇願する紫。

色々と納得できないがこの空気には耐えきれなかった。

大妖怪を屈服するとは沈黙、恐るべし。

「…えーと、それで？結局、小悪魔の能力は何なの？」

いち早く復活を果たしたパチュリーが打ちのめされた紫に当初の疑問を投げかける。

パチュリーの言葉で咲夜・レミリア・霊夢の順で3人が再起動した。拗ねた紫はティーカップをソーサーの上でくるくると回しながらもパチュリーの言葉には素直に反応した。

懷から扇子を出して先端部で肩をトントンと軽く叩く。

「まあ、今までの話の中では簡単な内容よ。彼女の能力は人里の半獣教師みたいに複雑な能力でもなければ、最終鬼畜妹のような分かりやすい強力な性能でもないわ」

「前置きはいいい加減にしなさいよ。今さら小悪魔の能力が超強力なチート性能だなんて、誰も思わないわよ」

「まあ、ある意味ではありがちよね。弱い能力を知恵で昇華させるなんて設定」

策を練るということはそうでもしなければ能力が通用しないということ。逆を言えば小悪魔の能力の純粋な強さはその程度でしかないということだ。

咲夜に紅茶を催促し、紫は机の上で手を組んだ。

「まあ、貴女達の言うように単純な能力の強さは並み程度よ。だけ

ど先程も言っただけ彼女の能力のせいでこの幻想郷の実力者達は今回の異変では役に立たないわ。特に「単純で強力な能力を持つ者」ほど小悪魔にとっては滑降な獲物なのよ」

「…それって、まさか…」

紫の今の言葉でパチュリーはだいたいの察しがついた。

「小悪魔の能力は…」

面倒臭いことになった。

状況の大方な整理を終えた美鈴の感想はまずそれだった。

簡潔に現状を説明するならば美鈴に蹴り落とされた小悪魔が地下の妹様の部屋まで直通。そして小悪魔が貫通させた穴を通って妹様が御光臨。それだけならまだしも何故か妹様の御機嫌はかなり悪い。あれか？あの日なのか？幼女なのには？

「うるせえよ」

「ちよつ、妹様？いきなりどうしたんですか！？」

「別に。神の声でセクハラ発言されただけだから」

「…このやり取りをこの幻想郷のどこかで誰かがやってる気がする」

「『氣』を操るあんたがそう言うんならそうなんじゃない？」

「…あのう…何やら御機嫌が斜めのようで…」

「あ、あん？」

「ひいつ」

フランの怒気を混ぜた視線が美鈴に向けられる。その圧力は相当なもの。美鈴が死を覚悟するほどだった。

端から見ている小悪魔でさえ表情が引きつっている。あの殺気を向けられている相手が自分じゃなくて良かったと心底思う。

「機嫌が斜めに見える？当たり前でしょ？気持ちよく寝てるところ

に天井突き破って小悪魔が地上から落ちてくるわ起き上がるなり地上に向けてビームは射つわビームで撃ち抜いた天井を突き破って地上に戻っていくわ、あんたら人様の部屋をなんだと思ってるのさ？いつからわたしの部屋は戦場になったのよ！しかも！！」

フランが取り出したのはバスケットボールくらいの大きさの瓦礫の破片である。一部が血で赤く染まっていた。

「これ、寝てるわたしの頭の上に落ちてきたんだけど？すっげえ痛いんだけど？けっこうヤバイ大きさのたんこぶができてるんだけど？今もこの帽子がたんこぶに当たって痛いんだけど？本当だったらこんな帽子取っちゃいたいけどキャラのアイデンティティーを保つために痛みを堪えて帽子着けてるんだけど？」

小悪魔と美鈴の背中に冷たい汗が流れる。ヤバイ。これはあれだ。俗に言う絶体絶命とかいうやつだ。

だってあれだもん。この幼女、完全に目が据わってるもん。

「あなた達、何か言うべきこと。あるんじゃないかなあ？」

低い声でフランは続けた。

腰に手を充て、首を傾げる。

月光に照らされたその姿は彼女の金髪と宝石のような羽も相まって、非常に神秘的な光景なのだが右手に持つ血の付着した石が全てを台無しにしている。

小悪魔と美鈴は顔を見合わせ、そして頷いた。

「悪いのは美鈴様ですねわかります」「悪いのは小悪魔さんですねわかります」

「キュツとして」

「「すいやせんっしたああああっ！！！！」」
土下座である。

プライドなんて気にしない。
そりゃそうだ、命は惜しい。
ドカンされちゃたまらん。

土下座の見本とも言える見事な土下座をしている2人にフランは絶対零度のような視線を向ける。

「最初から素直に謝つとけつての」

人によつては新しい世界に目覚めそうな眼力である。

小悪魔達も一瞬そちらがわに引つ張られるがなんとか踏み止まったりとか。

「…まあ、いいわ。本当だったらあんたらの膝のお皿でも割つてやるうかと思つてたけど、その土下座に免じて許してあげる。と、いうわけで」

フランは石の塊を放り投げ、その手で小悪魔が貫通させた穴を指差す。

「汚したら片付けてよね。わたしの部屋も含めてね」

「うとうう…わかりました。これは徹夜になるなあ…」

「おいこらちよつとまて」

フランが異論を唱えた小悪魔に鋭い視線を向ける。

「何さ。なんか文句でも？」

「あるに決まつてんでしょーが腐れ幼女！！パチユリー様達と意味深な別れ方をしたのに、それがこんなところでお掃除なんてしてたら間抜けもいいとこですよ！！」

「別れなきやいいでしょうよ、そんなの」

「…あのねえ…」

頭痛を堪えるように額に手を当てる。

「事はそう単純じゃないんですよ」

「それはそつちの都合でしょ？わたしらには関係ないじゃない」

「…妹様…貴女ね、御自分がどんだけの暴論を吐いてるかわかります？」

「あながち暴論でもないよ。事を難しくしているのはあなたの都合。

わたしたちには関係のない領域。それでも尚、気に入らないのなら……後はこれで決めるしかないでしょ？」

そう言っただけ彼女が懐から取り出したのは一枚のスペルカードだ。小悪魔の顔がひきつる。

「……何なんですかねえ。どいつもこいつも脳筋よろしく弾幕だのスペルカードの話に結論つけようとしちゃって」

「それが幻想郷のルールだしねえ。それに、あんたにとっても悪い話ではないでしょ？」

「こんの腐れ幼女、人の足下見やがって……」

どちらであつてもフランは小悪魔を逃がすつもりはないし小悪魔はここに止まるつもりもない。そうなれば先刻の美鈴の時のように互いの意地を通すためには武力行使しかないのだが、美鈴でさえ手こずる小悪魔がフランを相手に純粋な戦闘力で敵うはずもない。故に強者にとつて枷となるスペルカードルールは小悪魔にとつては非常にありがたい。逆を言えば小悪魔がここを切り抜けるにはフラン相手にスペルカードルールで闘うことは避けて通れない道ということでもある。

「ちなみに聞きますが、なんでわざわざ御自分の不利なスペルカードルールに譲歩してくれるんですか？」

「間違つて殺しちゃう確率が減るでしょ？」

「その余裕が妬ましいわ！！」

「どこぞの橋姫みたいなこと言つてないでさ。やるの？やらないの？」

小悪魔、溜め息をひとつ。

「やりますよ、やればいいんですよ、やれば。その代わり、一つ条件があります」

「こつちが譲歩してんのに条件出してくるわけ？」

「貴女にとつても悪い話ではありませんよ？」

「……聞くだけ聞こうか」

フランの答えに、小悪魔は笑う。二人の会話を聞いていた美鈴は何

か嫌な予感を覚えた。

これまでの戦いで美鈴は学んでいたのだ。小悪魔のこの笑みは、何か裏がある笑みだと。

「美鈴様と貴女がコンビを組むこと。これが条件です」

ほら来た。

フランは目を細める。

何かしら仕掛けてくるとは思っていたが、さすがに予想外だった。美鈴も目を丸くする。

「正気？それともわたしらを嘗めてる？」

「まさか、貴女方を嘗めてるならわざわざ殺生を禁じられているスペルカードルールで戦いませんよ」

「一応、理由を聞いとくわ」

「理由はいくつかあります。一つは貴女方2人を別々に相手するよりも時間が短縮できること。もう一つが美鈴様もスペルカードルールに引つ張り出すことです。先程は不意を突いて美鈴様に一泡食わせましたけどね、さすがに手品の種が切れたんですよ。そうなるたとえば妹様にスペルカードルールで勝つことが出来たとしても、続けて美鈴様に勝負を挑まれたら絶望的なんです。そんなことになるくらいなら貴女方に組んでもらってスペルカードルールで2人纏めて相手をした方がこちらとしてはやりやすい」

『スペルカードルール』というものの自体が「強者と弱者が平等に戦える勝負」という概念の下に成り立っている。

当然、小悪魔は弱者だ。知略を除けば彼女がフラン、美鈴に勝てる要素は残されていない。それならば美鈴にもスペルカードルールで戦ってもらえば小悪魔にもまだ勝機はある。

数の上での不利はどちらであっても覆せない。それならば最大限の

リスクを回避するまでである。

「成る程ね、とりあえずあなたにとっての利点は納得したわ。それで？2対1にする私にとっての利点は何？」

「ちよつ、妹様あつ！そこは素直に自分の有利と考えましようよ！」

「だってあんた、さつき小悪魔に隙を突かれて負けそうだったし」
「はう」

痛いところを突かれ胸を押さえる美鈴。その涙目に萌え萌えである。
「次にあんなミスやらかしたらお姉様に言いつけて紅魔館の皆にあなたのこと「中国」って呼んでもらうようにするからそのつもりで美鈴の顔が蒼白になる。

最近、その名前で呼ばれなくなったのに。あの悪夢がまた蘇るとい
うのか。

そんな二人のやり取りを見て、小悪魔は渋い顔をする。
こういうところはさすがと言ったところか。

「抜け目がないですね。そうやって美鈴様を追い詰めて私が突ける
隙を無くすわけですか」

「さあてね、何のことかな？」

「白々しいにも程がありますよ」

「おまじないみたいなもんでしょこんなの。この程度のことですべて
の見込みが無くなるなら勝負なんか降りちゃいなよ」

「まさか」

「だったらさつさとスペルカードが何枚か言いなよ」

おや、と小悪魔は意外そうな顔をする。

「私の枚数に合わせてくれるんですか？」

「そもそもあなたがスペルカードを持つてるのかどうかも疑問なん
だけどさ」

「持つてはいますよ。どっかの誰かさんが白黒を館の中に通しちゃ
うせいで、防衛の為に秘かに作っておいたんですよ」
そう言つて肩をすくめた。

「まさか初使用がこんな形になるとは思いもしませんでしたけどね」
黒い秘書服の裏に手を入れ、3枚のカードを取り出した。
それを2人に見せる。

「カードは生憎と3枚しか持ってません」

「充分だよ。それだけ持つてれば早めに勝負が決まるし」

「私としては勝負は長引いた方が都合が良いのですが」

「…どういう意味？」

「さあてね」

含みのある笑みを浮かべる小悪魔。フランは探るような視線を向けるが小悪魔は軽く流す。

「（美鈴が小悪魔とどういう戦いをしていたのか、最後の最後まで見てないから詳しいところはわからないけど。あの状況から考えたら小悪魔に美鈴が不意を突かれた、という感じがな。だとしたら小悪魔には美鈴に対して不意を突ける程度の実力はあるということ）」
小悪魔自身も時間が経てば自分が有利になるようなことを言っている。その言葉を全部信用するわけではないけれど、放っておけば何をしてくすのかわからないのも事実。

そうなると必然、フランは先刻の美鈴と同じ結論に至る。

「（短期決戦で一気に勝負を決める。私と美鈴の火力があれば無理ではない）」

それでも、どこか引つ掛かるのだ。結論としてはこれに間違いは無い筈。だけど、どこかしらでこの考えには穴がある気がするのだ。それもかなり根本的なところで。

「（妹様、ちょっと）」

「（何さ美鈴。何か良い考えでも浮かんだの?）」

「（そういうわけではないのですが…ちょっと違和感が）」

「（…ふうん?）」

やはり美鈴も思っていたらしい。

「（ちなみに聞くけど、その違和感の正体って何かわかる?）」

「（はい）」

おや？

フランは軽く驚く。

答えを期待していなかっただけに意外である。

「（矛盾してるんですね、彼女の都合が）」

「（…どうということ？）」

「（私も戦いに参加させた目的が私をスペルカードルールという土俵に立たせるのと、もう一つ。時間が短縮できるという理由があるんです。だけど彼女にとっては戦いは長引いた方が都合が良いと言っている…これって矛盾してませんか？）」

言われてみればそうである。

時間短縮という目的もあって美鈴とフランにペアを組ませたにも関わらず、長期戦の方が小悪魔にとって有利にはたらくというのは本末転倒である。

「（そもそも、何で小悪魔はそんな情報をわたし達に与えた？）」「口を滑らせたわけでもなければ気紛れでもないだろう。何かしらの意味があると考えるのが妥当。」

…仮に、もしこのまま何も疑問に思うことなく、小悪魔の言葉を真に受けていたのなら、自分達はどうか戦う？

当然、短期決戦を仕掛けるだろう。小悪魔に時間を与えることなく、何かをしでかす前に手数と火力で瞬殺するに決まってる。

「ああ、成る程ね」

気付いた。

大したものだ。あの局面でここまで頭が回るなんて！

抜け目が無いのはどっちだ。

「そういえばスペルカードの枚数、決めてなかったね」

フランはそう言う指を3本立てて微笑んだ。

「わたしと美鈴、それぞれ3枚ね」

「は？」

思わず間抜けな声を上げる小悪魔。

「いやいやいやいや！！ちょっと待ってください！！2対1を頼ん

だ私が言うのもなんですけど貴女方で2人合わせて6枚って！！私が不利にも程があるでしょ！」

「わたしが3枚で美鈴が2枚。わたし達合わせて5枚までなら妥協してあげるけど、これ以上は譲れないなあ」

フランは笑ったまま小悪魔を見据える。その視線に鋭いものが混じった。

「いつまで小細工するつもり？持つてるんでしょ？スペルカードを3枚以上」

小悪魔の表情が固まった。

「な、何でそうなるんですか……」

「あなたがスペルカード3枚だとあなたの枚数に合わせてわたしが2枚、美鈴が1枚だけスペルカードが使えることになる。もしくはあなたが使えるスペルカードを2枚に減らしてわたし達のペアが合わせて2枚でもいいわ。わかる？わたし達のペアは一度スペルカードがブレイクされちゃうと後がなくなるのよ。これはまあ、わたし達は2人であなたを相手にするんだからハンデとしては妥当かもしれない。けどねえ、あなたはこう言ったのよ。「長引いた方が都合が良い」ってね」

言葉の真意はどうあれ、そう言われてはフラン達の取れる戦法はただ一つしかない。

「短期決戦。それしかないのよ。わたし達の取れる戦術は。その上わたし達のスペルカードの枚数を考えれば闇雲にスペルカードを発動することもできない。かなり制限が掛けられちゃう」

「……さすがにそこまでのハンデは背負えないと？」

「できる。ただ気に入らない」

フランは簡潔に言った。

「そもそもあんたの提案でこっちがペア組んだり、あんたの一言でこっちは戦術が絞られたりさ。スペルカードルールで戦うのとカードの枚数をあんたに合わせることを決めたのはわたしだからそのことはカウントしないにせよ、さすがにあんたにそこまで好き勝手に

やらせるのは気に入らない」

「気に入らないって…」

「当然でしょ？だってあなた、スペルカード5枚持つてるじゃない。見逃そうかと思ったけどそこまで好き勝手されちゃうと看過できないな」

「持つてませんでば。3枚だけですよ」

「ダウト。わたしの目を嘗めちやいかんよ。あんたの懷からスペルカードの破壊の目が2枚分見えるもん」

「はいいいいっ!？」

小悪魔、驚愕の事実には奇声をあげる。

フランは鼻で笑った。

「甘いなあ小悪魔。嘘をつくにしても3枚は欲を見すぎだよ。防衛の為にスペルカードを作ったんだとしたら3枚は少なすぎる。わたし達に疑いの余地を与えちゃうのも当然でしょ」

「…いやまあ、ちよつと自分でもどうかと思いましたが…ええ」
疑いの余地を与えたとしても確実な証拠が無ければ通せると思って
いたのだ。だからこそ少し無茶をしたのだが、まさかこんな形で看
破されるとは思わなかった。

「美鈴様もそうですけど…貴女方の能力の活かし方は本来の用途から外れすぎてやいませんか？」

「新聞紙でお風呂に置かれた鏡を拭く世の中だよ？物の用途なんて
使い手のアイデア次第で千変万化だよ」

美鈴は思う。

何で吸血鬼の箱入り娘がそんなどこぞの完璧で嘯洒なメイドよろしくお掃除マル秘知識を知つとるのだ。

小悪魔は溜め息を吐きながら、懷から新たに2枚のスペルカードを取り出す。

「はい、これで全部。合わせて5枚です。嘘かどうかはご自分の目でご確認くださいな」

「ん、おっけー。それじゃ、わたしが3枚、美鈴が2枚。残機は全

員『1』だけ」

「また思いきった設定ですね」

「変に小細工させる隙を与えたくないしね。あんたにとってもかえってこういうのがやり易いんじゃない？」

「まあ、そうですね」

フランが美鈴に目配せする。美鈴は頷く。

小悪魔は自分のスペルカードの枚数を偽る事でこちらのスペルカードの枚数を1〜2枚に抑えようとした。

フランが言ったように一度でもブレイクされれば一人は脱落し、もう一人はスペルカード残り1枚というかなりシビアな状況だった。数の上では同じでも各個人の使える枚数には差が出るが故に起こりうる事態である。

事実上、3枚という枚数は小悪魔にとってかなり有利になるのだ。

フランがわざわざ小悪魔の嘘を見破り、互いのスペルカードを増やした理由がこれである。

互いに合わせて5枚であれば、相変わらず各個人の使えるスペルカードの枚数に差はあれど、一度スペルカードがブレイクされて一人が脱落するという事態は防げる。スペルブレイクの負担が減るのだ。枚数の問題は解決した。となると、次に警戒すべきは小悪魔が何をしかすのか。

先程の3枚という枚数では確かにフラン達にとって不利である。

それでも、フランと美鈴は最低でも1枚はスペルカードの発動が許される。即ち、2対1というルールの特性上、フランと美鈴のペアはスペルカードの同時発動という荒業ができるのだ。2人が同時に発動すればその威力、難易度は1対1のそれとは比べ物にならない。単純な実力では弱小妖怪程度の小悪魔にとって攻略は非常に困難。

「（逆を言えば、小悪魔はわたし達のスペルカード2枚同時発動に対して何らかの対抗手段を用意してるはず）」
何故そう思うのか？簡単である。

3枚という枚数ではフラン達にそれしか手が無いからだ。

フランと美鈴が合わせてスペルカード3枚だと「様子見でスペルカードを発動」ということができない。小悪魔が何をしでかすのかわからない上、小悪魔自身が「長期戦ばつちこい」と言っている以上、フラン達はスペルカードを止めの切り札として一気に勝負を決めるしかない。

そしてそれしか手が残されていないということは当然、その手を封じれば「詰み」である。

同じ道筋から思考を巡らせていけば頭の切れる小悪魔だ。気付かないわけがない。

小悪魔はフラン達の『スペルカード2枚同時発動』に対して、必ず手を打っている。

その手が何なのかわかればやり易くなるのだが…さすがにそれは高望みか。

「（まあ、知る手が無いわけじゃないしね）」

フランは空を仰ぐ。

疎らに浮かぶ雲が月と星に照らされる。

小さい雲が月を隠した。辺りが暗くなる。

「月がああ雲から顔を出した時が開戦の狼煙。おーけー？」

「了解しました」「ばつちこいです、妹様！」

小悪魔と美鈴がそれぞれ答えた。

辺りが静寂に包まれる。聞こえるのは穏やかな風の音だけ。少しずつ空気が張りつめていく。

月が顔を出した。

辺りが再び月光に照らされる。

「禁忌『恋の迷路』！」

「華符『セラギネラ9』！！」

「で・す・よ・ねー！」

フランと美鈴がスペルカードを唱える。

小悪魔は2人から距離を離す。

それらすべての事が開幕と同時に起きた。

色鮮やかな数多の段幕が小悪魔を囲う。距離が近すぎた。二人から離れられず回避ルートから外れてしまう。

逃げられない。

「（試し撃ちできるほど余裕のある枚数じゃないけどさ。出し惜しみできる状況でもないでしょ？）」

フラン達には2回までであればスペルカードを2枚同時に発動できる。最後の最後まで切り札として残しておくのも手だが、これまでの思考の道筋から考えて小悪魔は何かしらの対策を考えているはず。その「何かしら」が何なのかかわかればフラン達としてはやり易い。「何かしら」がわかれば逆に対策できるのだ。そしてその「何かしら」が知りたければ小悪魔にその「何かしら」をやってもらうのが手っ取り早い。

故に開幕早々に虎の子「スペルカード同時発動」を惜しみ無くやってみせたのだ。

至近距離からスペルカード2枚分の弾幕である。回避ルートから早々に外れてしまっているため弾幕の軌道パターンを知っていたとしても避けるのは不可能に近い。

「（出し惜しみなんてさせません。貴女にも手の内の一つを公開させていただきます！）」

美鈴はほくそ笑み、フランは 驚愕に目を見開く。

美鈴にはわからない。だがフランには解った。『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』を持つフランだからこそ見えたのだ。

小悪魔が手を翳す。その手のひらに各弾幕の破壊の目が集まる。そして

「キュツとして」

握った。

「ドカーン」

すべての弾幕が爆散した。

後に残ったのは霧散した弾幕の細かな欠片。それもすぐに消えてなくなる。

美鈴には何が起きたのかわからない。突然の出来事にただ呆然としている。

それはフランも同じだ。違うのはフランには見えていただけ。小悪魔が弾幕の破壊の目を握ったのが見えていただけだ。

二人が呆然としているその隙を小悪魔は見逃さない。即座にレーザーで二人の動ける範囲を制限し、弾幕を放つ。

「おっと」「やっばい……！」

さすが戦い慣れているだけあって呆然としている中でも小悪魔の動きに反応した。二人は小悪魔の弾幕の危険域からいとも容易く脱する。

「むう……さすがに避けますか」

「嘗めんなよつてね。それよりもあなた、いったい何をしたのさ？」

小悪魔は静かに微笑む。

「あなたには見えてたんじゃないですか？手の内が見たかったのでしよう？見せてあげましたよ？惜しみ無く」

「へえ……」

フランは探るような視線を小悪魔へ向ける。

「なあるほど。それがあなたの秘策か」

美鈴はフランに目を向ける。

美鈴には何が起きたのかわからない。だが、手を翳し、握った直後に弾幕は爆発した。これはまるで

「そう難しいことはありませんよ」

小悪魔は尚、微笑みながら続けた。

「『能力を真似る程度の能力』…それが私の能力です」
「能力を…真似る？」

「美鈴様の『気を操る程度の能力』で弾幕の位置をサーチして妹様の『あらゆる物を破壊する程度の能力』で各弾幕の破壊の目を手に収集、そして握る。あとは見ての通りです」

「う、嘘でしょ…」

美鈴が呆然と呟く。

小悪魔にそんな協力的な能力があったなんて。

それはつまり小悪魔に対して弾幕は効かないということだ。それどころか小悪魔はやろうと思えば美鈴達を簡単に壊せるのだ。弾幕のように。

「（…本当に？）」

フランは考える。

『能力を真似る程度の能力』

なるほど、確かに強力だ。

簡潔でわかりやすい。

おまけに先程のように能力を組み合わせることもできるらしい。

なんともまあ、誰でも考え付くような、餓鬼の思い付いたような能力である。

能力の使い方によっては小悪魔は比喻無しでこの幻想郷のトップに立てるだろう。

しかし疑問に思う。

それだけ強力な能力を持つておきながら、小悪魔は何故策を練る？
小悪魔のやり方は小賢しい。自身の能力で全てを押し伏せようする
気概が感じられないのだ。

フランが己の能力を全面に押し出していくように、何故小悪魔はその能力を誇示しないのか？
結論は簡単に辿り着く。

しないんじゃない。できないんだ。

「真似をする」…か。ふうん、「真似をする」ねえ」

「…さすがに気付きますか」

「当たり前でしょ。遠回りなのよ、あんたのやり方」

小悪魔は苦笑する。

そう、小悪魔の能力は『他者の能力を使える』のではない。『他者の能力を真似る』のだ。

つまり小悪魔の能力には何らかの制約があるということだ。そうでなければ小悪魔は美鈴と相対したときにフランの能力で美鈴の破壊の目を握ればそれで終了だ。彼女を突破するのにここまで苦労なんてしなくて済む。そもそもフラン達と戦うのにスペルカードルールに拘る必然性が無いのだ。

小悪魔のやり方は小手先の器用さが目立つ。となれば小悪魔の能力に何らかの制約があると考えるのが妥当だ。

そこまで理解が追い付いて、美鈴は先程の戦いで抱いていた疑問が一つ氷解した。

この状況を見れば彼女の能力の制約にも考え付く。

「成る程、私が貴女を蹴り落としたとき、近くに衝撃を和らげる打ってつけの泉があったのに、どうしてわざわざ地下にある妹様の部屋の方向に落ちるよう調整したのかわかりました」

そう言つて美鈴は小悪魔を見据えた。

「貴女の能力は真似をする能力を持つ相手が近くにいるか、または視野にいないと真似できないんですね。だから強力な能力を持つ妹

様をこの場に引き摺り出すために、妹様の部屋がある地下に狙って落とされた。今のこの状況は貴女にとっては想定範囲内。いや、貴女がこの状況を作り出したんです」

説明を聞き終えたフランは美鈴の方を向いてニヤリと笑う。その笑みに小悪魔は嫌な予感を感じた。

この笑みはあれだ。あの白黒の魔法使いが図書館にある欲しい（盗みたい）本を見つけた時の笑みに似ている。

「へえ、そんなこともあったの。つまりわたしはまんまと小悪魔に誘き出されたわけか。良いことを聞いたわ、美鈴。これで小悪魔の能力の大まかな制約は解った」

予感的中である。小悪魔の表情が固まった。いつかバレることだとは思っていたが今この場で気付かれるのはさすがに想定外だ。

「えー、もう解ったんですか。早すぎませんか？物語的にはもう少し迷って考え付いた先に答えに行き着くのがいいかと」

「知らないわよそんなの。わたしの目は広いのさ。あなた、魔力をかなり消耗してる。どうやらあなたの能力は真似をする能力に依じて魔力を消費するみたいだね？それでもわたし、魔法少女ですから魔力の動きには敏感なんだよ」

「魔法少女…だと!？」

「何故そこに食い付く」

「淑女ですから」

そう言つて小悪魔は腰に手を当て目を細めた。

自分の能力の大半を知られた。それも知られたらまずいウィークポイントである。こうなるとまた先手と後手は入れ替わる。

これまでは情報量と策でアドバンテージで優勢に立っていたが、彼女の能力を知られたことで彼女のこれまでの行動の真意まで知られてしまった。それは即ち、小悪魔の弱点の露呈でもある。

フランは美鈴に再度、目配せする。短期決戦から長期戦へと移行する、と。

「（「長期戦になると有利」だつて？違つてしょ、「長期戦になる

と不利」になるんでしょ？」

キャパシティ

魔力の容量には当然限界がある。そしてその魔力をコストとして小悪魔が能力を使うのなら、その消費は出来る限り抑えたい。ましてや小悪魔の弾幕やレーザーは全て魔力から生成されている。つまり小悪魔にとって魔力の枯渇というのは死活問題なのだ。

従って魔力消費の負担が大きい長期戦は小悪魔にとって不利。

だからこそ、「長期戦ばつちこい」とブラフを張り、フラン達がそれに合わせて短期決戦で来るよう仕掛けた。

しかし、小悪魔の能力が「魔力を消費する」ということが解れば弾幕も魔力から生成している小悪魔にとって魔力が生命線であるということは猿でもわかる。そうなれば魔力のキャパシティがそこそこ豊富な彼女でも魔力の消費が激しい戦い方であるならばすぐ「長期戦が苦手」という答えに行き着き、「長期戦は有利」という発言もブラフと看破する。

フラン達が短期決戦を挑む理由がなくなったのだ。

「さあて、仕切り直しといこっか！」

そう言っつてフランは大量の弾幕を小悪魔に向けて放つ。美鈴もそれに続いて小悪魔に弾幕を撃ち込んだ。

「やっぱりそうなりますよね」

小悪魔は呟く。

解っていたことだ。

いずれバレると思っていたことなのだから。

美鈴はともかくとして吸血鬼という魔力を糧にする魔族であるフランを相手にしているのだ。魔力の消費量が異常に早いことに気付かないわけがない。

しかし気付かれるのがこんなに早いのは想定外だった。もっとも、それもよく考えれば当然と言える。

レミリアであれば気付くのもっと時間が掛かっただろう。しかしレミリア以上に能力が強力で制御が難しいフランの場合、レミリアとは違う何か別の力に頼らざるを得ない。となれば魔族である吸血

鬼のフランが頼るのもつとも手頃な力は当然、魔力になる。故にフランはレミリア以上に魔力の扱いを熟知しており、その能力は並みの魔術師を凌駕する。

フランが魔法少女たる所以である。

「（よく考えれば当然なのか。妹様が自分の能力に悩んで涙ぐましい努力をしているのは周知の事実（本人は隠してるつもりだけど）。吸血鬼としての己の性能をお嬢様みたいに十二分に発揮できない妹様が別の力を駆使して戦う術を身に付けていても何ら不思議はない）

素直に羨ましい、そして凄いと思った。己の背負った十字架に抗うその姿に。

十字架の重みに耐えられなかった小悪魔には、その姿は眩しすぎた。「おっと、危ない危ない」

前・後ろ、そして頭上の3方向から来た弾幕をギリギリで避ける。

翼を駆使して空中での体勢を整えた。

頭を切り換える。

抗う時間も、後悔する時間も、もう過ぎたのだ。

自分に手を差しのべた八雲紫と博麗霊夢を拒絶したあの時に。

今はもう進むだけ。

たとえその先に更なる破滅と後悔が待っていたとしても、抗うことを放棄した自分には進む道しか残されていない。

小悪魔は懷からスペルカードを取り出す。それを視認したフランが微笑んだ。

「あら、とうとう御披露目かしら？」

「私も出し惜しみできるほど余裕があるわけじゃないんですよ」
翳したスペルカードが光り輝く。

「喜劇『頭彩る断頭台』！」

高らかな宣言に呼応するように大量の剣を模した弾幕が現れる。そして複雑な軌道を描きながらフランと美鈴に向かっていく。

「（そこそこ複雑で読みづらい弾幕。だけどまだまだね。弾幕の軌

道がちゃんと構築されてない)」

スペルカードルールの一つとして「回避不可能な弾幕」は禁止されている。どれだけ複雑に見える弾幕でも、回避ルートか安全地帯というものを必ず用意しなければならない。故に、「如何に回避ルートを分かりにくくするか」がスペルカードルールのキーの一つなのだ。

小悪魔の弾幕の軌道は複雑だが回避ルートが分かりやすい。

そこらの妖精やスペルカードルールの初心者相手ならば有効だろうが、フランや美鈴のようなこのゲームに精通した者相手には通用しない。

案の定、的確な回避ルートを読まれフランと美鈴にはあつさり弾幕を攻略される。そのまま時間は過ぎ、スペルカードの効力が切れた。スペルブレイクである。

それを確認すると小悪魔は直ぐ様二枚目のスペルカードを取り出した。

「偽曲『デモニック・アークロード』！」

「随分とまあ」

大盤振る舞いだね。

そう続けようとしたフランの表情が固まった。それは美鈴も同じである。小悪魔の弾幕の動きが未熟だったのを見て、弛緩していた二人の頭に警報が鳴り響く。

小悪魔の弾幕を避け続けた結果、フランと美鈴の距離は近くなった。分かりやすい回避ルートを辿って避け続けた結果、二人は一ヶ所に固まった。

これが、意図的に固められたのだとしたら？

「っつ！？」

本能と勘で危険を察知。二人は即座に距離を離す。その二人がいた場所を大量のレーザーが通過した。

レーザーはそのまま直進し、紅魔館の屋根の一部を消し飛ばす。その威力に、美鈴の背中を冷たい汗が伝う。

「へえ…まだそんな奥の手を隠し持ってたの」

フランは感心するように呟いた。

小悪魔の翼手から放たれたレーザー。これまでのとは数も威力も比較にならない。そして何よりも特筆すべきなのは弾速が驚異的に速いのだ。

魔理沙の『マスタースパーク』にも通ずる威力と初見殺しに特化した弾幕である。

小悪魔は顔をしかめる。

二人に驚かれはしたがスペルカード2枚のコストにしては結果が割りに合わないにも程がある。

おまけに自身の弾幕の未熟さも露呈してしまった。目に見えている以上に、これらデイスアドバンテージは大きい。

スペルカードの効力が切れた直後、フランと美鈴は反撃に移る。小悪魔に向け大量の弾幕を放った。再び回避に徹することとなる小悪魔。戦況はいよいよ本格的に小悪魔の不利へと傾いていく。

小悪魔の勝ちの目は殆ど残されていない。

魔力の容量の問題から小悪魔はフラン達の弾幕を「能力を真似て破壊する」という手段が使えない。フランの能力を真似ること自体はやろうと思えばできるだろうがそうすると通常の弾幕やスペルカードで使用する弾幕の分の魔力のストックが枯渇してしまう。

故に小悪魔の能力はこの状況ではあつて無いようなものだ。

スペルカードも経験の差から二人には通用しない。

こうなると通常的手段ではこの勝負、小悪魔に勝てる要素は皆無に等しい。

「（そう、「通常的手段」ではね）」

小悪魔が勝つ別ルートがあるにはある。そしてフランと美鈴はそのルートに気付いている。

『スペルカードルール』 これを悪用するやり方だ。

「（私と美鈴が弾幕を同時に放つ。この時に私達がミスを行えばルール違反で私達に敗北させることができる）」

前述したようにスペルカードルールは「絶対に避けられない弾幕」は禁止されている。その制約はスペルカードだけでなく通常弾幕にも課せられる。故に二人一組であるフランと美鈴は弾幕の軌道の管理が非常に難しい。

何故ならパートナーの弾幕の軌道も把握していなければ二人の弾幕が重なり「回避不可能な弾幕」になってしまうからだ。そうなれば当然、フランと美鈴ペアの反則負けとなる。二人とも何気無くやっているがかなり高い技術を要求するのだ。

逆を言えば

「（私達にミスを誘発させれば小悪魔さんの勝利となる）」

スペルカードも能力も事実上封殺された現状、小悪魔にはそれしか手が無いだろう。

そうなると問題はフランと美鈴にどうやってミスを誘発させるか。そもそもその大前提として二人が弾幕を同時に放たなければならない。しかし短期決戦から長期決戦に変更した今、二人がスペルカードを同時に発動する意義は薄い。次にスペルブレイクされればリタイアとなる美鈴にしてみれば尚更だ。彼女にはもうスペルカードは1枚しか残されていないのだから。

しかし

フランは美鈴に短くアイコンタクトを送る。美鈴はそれに力強く頷いた。

「小悪魔っ！」

攻めの手を止め呼び掛けるフラン。小悪魔は怪訝な表情を向ける。

「なんですか？」

「動いてあげるわ、あなたの望む通りにね！」

そう言っただけでフランと美鈴はスペルカードを取り出した。

小悪魔は二人の意図に気付く。

「まさか」

「禁弾『スターボウブレイク』!!」

「虹符『彩虹の風鈴』!!」

小悪魔に利するかと思われたスペルカードの同時発動だ。しかも見る限り回避ルートが無い。二人の合わせた「回避不可能な弾幕」が小悪魔へ向けて放たれる。

「血迷いましたか？私の見間違いでなければ回避ルートが見当たらないんですけど！」

「あら、心外ね。ちゃんとあるわよ？」

フランは悪戯が成功したような無邪気な笑顔で言い放つ。

「私と美鈴の前方にね、安全地帯があるの見えない？わたし達の通常弾幕を回避しやすくするために距離を離してたんだろっけど、裏目になったね」

「…そうきたか」

小悪魔は目を細めた。

なるほどよく見なくとも分かる。フランと美鈴の前方では弾幕があらさまに空いていた。

上手い手だ。大量の弾幕にばかり目が行っていれば気付くのは困難だろう。

通常弾幕との組み合わせが光る搦め手だ。

フランの言う通り、距離を離したことが裏目になった。

今からではフランまたは美鈴の前にある安全地帯に間に合わないだろう。

「諦めるのはまだ早いなあ」

フランは言葉を紡ぐ。

「この弾幕の軌道にはよく目を凝らせば分かる、安全地帯へのルートが隠されているわ。頑張って見つけてね？」

違う。

これはフェアにするためではなく小悪魔への追い討ちだ。これで小悪魔は彼女達の弾幕に万一のいちゃもんも言えなくなった。

意図的に安全地帯を小悪魔の行けない場所に用意するのではその安全地帯は無いも同じ。しかし、そこまでの道が用意されているのならば文句は言えない。そのルートを分かりづらくするのはルールの範囲内である。故に二人の弾幕には非の打ち所が無いのだ。

これで小悪魔は純粋な「弾幕の軌道を読む力」を求められる事となった。スペルカードルール初心者的小悪魔にである。

小悪魔にとってあまりにも酷と言えるこの状況で彼女は

「あは」

笑った。

この時、フランは初めて動揺を見せる。

「安全地帯？回避ルート？要らないですよ、そんなの」

「何を言って」

「端からまともな勝負をするつもりは毛頭無いさ！」

艶然と笑い小悪魔は手を翳す。その動きにフランと美鈴の表情が凍った。

「なっ…！？」「まさかっ！？」

「キュツとして」

フランには見えた。

各弾幕の破壊の目が小悪魔の手に集約されるのを。

そして

「ドカーン」

握った。

先刻と同じ光景が繰り広げられる。弾幕が一つ残らず爆ぜていく。それは先程も見た光景。しかしその光景は初見の時以上の衝撃を二人に与えた。

「紅美鈴は2回目のスペルブレイクだ。これで私と妹様の一騎打ちとなったわけだ」

「…確かにそうだね。だけどあんたはわたしの能力を真似たことで魔力を殆ど空にした。スペルカード2枚分か、通常弾幕だってそんなに長い時間放出できるほどストックが残されてない。もともとわたし達に有利なこの状況、どうやってわたしに勝つの？どうやって弾幕をわたしに当てるの？」

「違うな、前提からして間違ってる」

小悪魔はばつさりと切り捨てた。

フランは舌打ちをする。

「気付いてたんだ？」

「道筋を辿れば必然と行き着く答えですよ。私のブラフを看破して「私が長期戦は不利」と判断した貴女方は短期戦から長期戦へと移行した。だけど貴女方だって長期戦が有利なわけじゃない。二人一組であり弾幕の軌道管理が難しいと当然かなりの集中力がいる。そんな集中力を長時間保つなんてお嬢様に似て割と短気な妹様には困難を極める。だからその集中力が持続している内に決着をつけたかった。長期戦で粘って私の魔力切れを待てば確実なのにわざわざ小手先を駆使して策を労したのはそういうことだろう？」

「…すごいね」

素直に感嘆の言葉が口を突く。あの短時間でそこまで頭が回るなんて。しかし、解ったからどうしたというのだ？

結局のところ小悪魔はフランと美鈴のスペルカード同時発動に対して「安全地帯までのルートを探す」という手ではなく「能力を駆使する」という手っ取り早く、しかしこの状況では最悪とも言える手で強引に解決した。

「（弾幕を全て破壊され強制的にスペルブレイクとして処理されたから私はリタイアになった。これで妹様と小悪魔さんの一騎打ち。数の不利は解決できたけど結果として魔力が枯渇してスペルカードどころか通常弾幕もまともに使えない小悪魔さんに何ができるの？）

多少、混乱の残る頭で美鈴は考える。
確かにこれで1対1に持ち込めた。一見すると数の上での条件は同等のように感じる。

しかしフランにはまだ奥の手があるのだ。

禁忌『フォーオブアカインド』

フランが4人に増えるという異色のスペルカードだ。発動してしまえば先程以上の数の暴力が小悪魔を襲うだろう。
今の小悪魔に、それを凌ぐ手は残されていない。

「終わりにしようか、小悪魔」

フランは囁くようにそう言い、懷からスペルカードを取り出す。

「魔理沙や美鈴とはまた違った弾幕ごっこで楽しかったよ。だけどもう終わり。これで詰むわ」

「私は不愉快でしたけどね。こちとら急いでるっちゅーに。けどまあ、最後の言葉には同意です」

小悪魔は腰に手を当て、言い放つ。

「チェックメイトですよ、妹様」

フランは小悪魔を睨む。

「この状況であんたに勝ち目がある？」

「だから言っただろ？前提が違うんだ」

「何それ。無駄話はいいい加減にして」

「先程ね、美鈴様にも言いましたが…」

フ란の言葉に構わず続ける小悪魔。

「私はね、^{ギャンブラー}賭博師じゃないんだよ」

小悪魔の口の両端が吊り上がる。フ란は背中に寒気を感じた。

「端からおかしいんだよ。貴女方のミスを指摘して判定勝ちなんてあまりにも他人任せ。受動態にも程がある。わざわざ2対1にしておいて妹様への対策がそんな博打めいた策なわけがないだろう？」

そう、そもそもフ란は小悪魔に誘き出されたようなもの。あの悪魔の妹を戦場に引き摺り出したのだ。当然、フ란の後始末の策を用意している。

「そしてもう一つ。私はこの楽園 幻想郷を滅ぼす。その障害は確実に排除する。故に最悪の障害と成りうる妹様を生かすつもりもない」

「…弾幕ごっこでは殺生を禁じられているのを知らないの？」

「知ってるとも。だから私は殺さない。手を下すのは私じゃない」

「何を言って」

小悪魔はフ란を指す。

フ란と美鈴は圧倒される。

その姿は悪魔とは思えないほど幻想的で どこか危うく、歪だった。

「タイムオーバー」

小悪魔の姿が突然見えなくなる。

そこから消えたのではない、逆光で見えづらくなったのだ。

逆光？

そこまで理解が追い付いて、気付いた。

「……え？」

目が馴れて逆光の中でも小悪魔の表情が分かるようになった。
小悪魔は寂しげな笑顔を向ける。

「これが貴女の結末だ」

紅魔胡の向こう　彼方から昇る日を背にして言い放つ。

「種族の業火に焼かれて死ね」

辺りに皮膚の焼ける臭いが漂う。目を見開き呆然と日の出を見ていたフランは、ようやく状況を理解した。

「あああ……っ！」

それに伴い肌の焼ける痛みが届く。それは吸血鬼たる種族の宿命。
そして

「あああああああああああつつつつッ！！！？」

少女の断末魔が辺りに響く。

午前4時52分。

幻想郷に幾度目となる朝が来た。

「成る程ねえ…能力が強い奴が下手に今回の異変に関わるとヤバいわけがよく解ったわ」

小悪魔の能力の説明を聞き終えたレミリアは頬杖をつき、目を細めた。

小悪魔の能力は『他者の能力を真似る程度の能力』。能力の制約は

- ・ 真似る能力を持つ相手が近くに居ること。
- ・ 真似る能力に応じて魔力を消費する。
- ・ 『〴〵程度の能力』として分類されていること。
- ・ 能力名と能力の使い方を知っていること。

大きく分けて以上の4つ。

地球の裏側にいる能力者の能力は真似できないし咲夜の能力は莫大な魔力を要するため事実上真似できない。そしてレミリアの蝙蝠に化ける能力は真似できないし人里によく説教しにくる物好きな仙人の能力は判明していないため真似できないということだ。

「それにしても今更ながらに思ったんだけど、小悪魔は随分と貴女達に自分の情報を話したのね。異変を起こしたときに反応する板のことといい、余程自分の起こした異変を止めて欲しいのね」

「まったくね。それなら最初から起こすなっつての」

レミリアの言葉に霊夢は溜め息を吐く。自分にも負い目があるため深いことは言わないが、それでも愚痴りたくはなる。

「さて、あの娘についてある程度話したところでこれからのことだけだ」

紫が今後の方針を話そうとした時、凄まじい爆音が空気を震わせた。ティーカップとソーサーがカタカタと音を鳴らす。

霊夢と紫は目を丸くした。

「何事よレミリア」

「わからないわ。もしかしたらフラン、あの娘がまた脱け出したのかも……」

「音の方角からして東側ですわ」

頭の中で図を描き、大まかな場所の予測をする咲夜。

彼女の言葉に、その場にいる者に悪寒が走った。

小悪魔がこの図書館から去って1時間弱経過した。彼女がこの紅魔館から出ていくのに正門を通っていたとしたら？

当然門番である紅 美鈴と遭遇するだろう。そして普段はサボリ気味の彼女だがこういう異常事態の時、彼女はその能力の特性も相まって非常に敏感だ。

もしかしたら小悪魔の行く手を阻もうとするかもしれない。

そこまで考えが及んでから、その場に居た者の判断は早かった。

紫がレミリアを向く。

「場所は？」

「おそらく正門近くにある広場の辺りよ。咲夜、ナビゲーター！」
「畏まりました」

場所さえ分かれば最速で着くであろう紫と咲夜がその場から姿を消す。後に続きレミリアと霊夢がその場を後にする。

そして

「ちょ、レミィ!？」

場所を知ってたとしても一番着くのが遅いであろうパチュリーはレミリアに首根っこを捕まれる。

「く、苦しいっ」

「つべこべ言わない!!」

「むきゅっ」

じたばたともがくパチュリーにレミリアは一喝。パチュリーは大人しくなった。

小悪魔の元にたどり着く前に窒息しないことを願うパチュリーであった。

姉から日に浴びた時の話を聞いたことはあった。その痛みはまさに地獄だったと言う。

その地獄のような痛みを自分がこんな形で味わうことになるとは思わなかった。

「い、妹様っ!？」

「来るな!!」

涙目で駆け寄ろうとする美鈴を怒声で制止する。

戦いはまだ終わっていない。

まさかこんな方法で戦場に引き摺り出した自分を処理するとは完全に予想外である。

間抜けなのは自分だ。吸血鬼にとって日光は致命的である。にも関

わらず日の出の時間を忘れていたなんて笑い話もいいところだ。

肌が焼かれる痛みを意識を凌辱されながらもフランは思考を巡らす。スペルカードを取り出し、その手に握る。

まだ負けじゃない。

勝ちの目はまだ残ってる！

「続行といこうかあ、小悪魔！！残念だけど、コンティニューにはまだ早いさ！！」

獰猛な笑みを浮かべ小悪魔を睨む。

己の身が燃え尽きるまでまだ猶予がある。それまでに決着を着ける。

「さすがあ。焼かれても尚臨むか。いいよ妹様、来なよ」

小悪魔もまた冷笑を浮かべ、臨戦体勢をとる。端からこれで終わりとは思ってない。

「禁忌」 「させないよ！！誓約」エンゲージ・イン・ケージ「制約は籠の中」！！」

フランが唱えるよりも早く、小悪魔が唱えた。

翼手より放たれたレーザーがフランを取り囲む。

それはまさしく「籠」だった。弾幕を当てるつもりは更々ない。安全地帯となる空間だけを用意してその周りを隙間なくレーザーが囲う、相手の動きを封じるためだけに特化したスペルだ。

フランのスペルカード「禁忌」『フォーオブアカインド』を封殺するための秘策。

身動きの取れないフラン。立場が完全に逆転していた。今のフランにとって長期戦は死を意味する。

このまま身動きが取れず時間が過ぎればそれだけフランの身体は焼けていく。

しかし、そんな状況に置かれて尚、フランの表情からは笑みが絶えない。

「だよね、あんだだったら『フォーオブアカインド』に何らかの対策をと思ったたよ！だけど残念、わたしが使うのは違うスペルだ！！」

フランの翳した手に先程まで地面に刺さったままだった杖が戻った。

それを見た美鈴はフ란の狙いに気付く。姉の「神槍『グングニール』」とは対を成す高威力の大型スペルカード。

「貫け、禁忌『レーヴァテイン』!!」

杖を媒介とした魔力の塊が小悪魔に向け発射される。

スペル発動中の小悪魔はその場から動けず、フ란の能力を真似できない。

己へと向け放たれたそれを見つめ、小悪魔は呟いた。

「最後の鍵が揃いましたね」

そう言つて微笑み、手を翳す。

「これで完結。私の描いたシナリオに狂いなし」

小悪魔の目の前で突然、空間が裂けた。それは裂け目の両端にリボンが結ばれ、裂けた先からは幾万の目が此方を覗く。

フ란の放った『レーヴァテイン』は呆気なく裂け目へと呑み込まれた。

それと同時に時間切れ、小悪魔のスペルカードがブレイクする。

「スキマ……ですって？」

「なあるほど。紫は自分の能力は真似されないって言つてたけど。空間と空間の境界までは操れるみたいね」

呆然とするフ란を日影が覆う。そして後ろから腕を回された。

フ란はハッとして振り向く。

「お、お姉様!?」「お嬢様!」

「悪い子ねフ란。せっかく綺麗な肌してるんだから、日に晒しちゃダメよ」

フ란と美鈴は驚愕、そしてどこか安堵の混じった声をあげた。レミリア・スカーレットがそこにいた。

小悪魔と同じ悪魔の翼がフ란の身を日射しから守る。

妹の身代わりとなったレミリアの肌が先刻のフランのように焼かれていく。しかしある程度の耐性があるのか彼女の表情に変化はない。余裕の笑みを浮かべ、主として従者に命ずる。

「さーくーや、日傘が欲しいところだけど先ずはアレが優先ね」

「了解ですわ、お嬢様。美鈴、あんたもよ」

「は、はい!!」

美鈴の横に突然現れた咲夜は小悪魔に向け臨戦体勢をとる。一度は飛び出しそうになった美鈴だが、動かない咲夜に気付き同じように臨戦体勢に留めた。

「ちよつとレミリア! あんた自分の友人を放つて先に行かないでよ!!」

「む…むきゅ…」

願い虚しく窒息しかけているパチュリィを抱えて霊夢がやってくる。そして、小悪魔から10メートル離れた先でスキマが開く。中から八雲 紫が現れた。

小悪魔は笑う。

「あらま、さつき別れたばっかなのにもう会いましたね」

「よく言うわ」

白々しい小悪魔の言葉にフランが鼻で笑う。姉に抱かれているのが恥ずかしいのか、逃げようともがきながら続けた。

「『デモニック・アークロード』だっけ? あんた、わたし達が避ける事を想定してたでしょ。館の一部を壊してその衝撃でこいつらをこの戦場に引き摺り出す。最後にわたしが身動き取れない状態から『レーヴァテイン』を射つのもあんたの中では想定内。八雲紫の「スキマ」を使ってわたしのスペルを呑み込むつもりだった。わたしを戦場に引き摺り出した時とやり口がまったく同じじゃない」

横目でフランを一瞥した紫は再び小悪魔へと視線を戻す。

悪魔の妹が何故この場にいるのか解らなかったが今の話を聞いて大体の状況は把握できた。

成る程、どうやらまんまと誘き出されたいらしい。

「彼女達と弾幕ごっこをしてたみたいね。どう？幻想郷名物の遊びだけど、お気に召したかしら？」

「ルールの穴が目立ちますね。悪用し放題ですよ」

「そう、だったらアドバイスが欲しいわね」

「いずれ壊される幻想郷の名物にアドバイスも糞も無いでしょうよ」

「何言ってるのよ、あんたがここを壊さなければ何ら問題はないじゃない！」

「…おや」

小悪魔は目を丸くする。

「大きくなりましたね、霊夢さん」

「あんたは頭ばっかでつかくなりやがったわね。こんなバカ辞めてさっさと今までの日常に戻りなさいよ！これまでに日常に不都合でもあったの！？」

「霊夢の言う通りよ」

霊夢の言葉に紫が続く。

「戻りましょう。貴女が苦しむような選択肢を選ばないで」

いつもの胡散臭い空気をかなぐり捨て、己の心をさらけ出して訴えた。

「幻想郷は全てを受け入れる。貴女だって受け入れてみせる」

「…やめてくださいよ」

泣き笑いのような表情を浮かべて小悪魔は弱々しく首を横に振る。

「戻る気はないし立ち止まるつもりもない。私を止めたければ殺して下さい」

「っ…私に…それをしろって？」

「できなければ幻想郷こくが壊れるまでです」

明確な拒絶。

己の心を切り裂きながら、小悪魔は破滅へと向かう。

もう立ち止まる時は過ぎた。

「私は…私の存在意義に懸けて、全力で壊します。この楽園を。私が壊すか、私が壊れるか、どちらが先ですかね？」

紫は何も言えなくなり、立ち尽くす。妖怪の賢者と言わしめる自分の知恵・知略は、自分の救いたい者へ向ける言葉を与えてくれない。「ふ…ざけないでちょうだい…!!」

か細く力強い、矛盾した声が空気を震わせた。

パチュリーは呼吸を乱しながらも構わず続ける。

「あんたが…弱いせいで…魔理沙にどん…だけ、本が盗まれてると…思ってるの!？」

「え、ちょ、異議ありいいいい!!私だけじゃなくて魔理沙さんを通して美鈴様にも責任はあると思うんですけど!？」

「それはそれ!これはこれ!!」

「理不尽!？」

顔をひきつらせる小悪魔にパチュリーはビシッと指を差す。

「逃げるなら逃げるがいいわ。だけど貴女が今まで魔理沙に盗まれた本の清算を終えるまで、逃がすつもりはないわ!絶対に連れ戻す!!」

「…ま、そういうことよね」

「お、お嬢様?」

不吉な笑みを浮かべるレミリア。

「今は逃げなさい、そして貴女のやれるだけのことをしなさい。私達はどんな手段を用いても貴女をこの館に連れ戻すわ」

「…めんどくせえ…」

元々、表に出つつある素がさらに出る。今さら隠せもしないが。

「好きにして下さい。言われなくてもそうするでしょうがね、貴女方は」

彼女達に背を向け、小悪魔は翼を広げる。

「…期待しないで待ってます」

そう言つて今度こそ、彼女はこの紅魔館から立ち去つた。
その最後に残した言葉が小悪魔なりの「助けて」というメッセージ
だったのか。それとも単なる挑発だったのか。
その場の誰にも解らない。

霊夢がスキマに吸い込まれてからそれなりに時間は経つた。彼女が
淹れた薄いお茶は既に夜中の冷えた空気の影響もあり冷めてしまつ
ている。

風が吹いた。

霊夢がスキマに吞まれてからも彼女　　八雲　　藍はそこから動かな
い。

縁側に腰を下ろし、柱に身を預けていた。

目は閉じられている。まるで寝ているようだった。

再び風が吹く。

彼女の金色の髪と九尾の毛が風に靡く。

「なかなか絵になる構図ね」

目をゆっくりと開く。

開けられた視界の中に、鳥居の下に立つ少女の姿を認めた。

アリス・マーガトロイド

七色を二つ名に冠る彼女は藍に向け手を伸ばし、両手の人差し指と
親指で作った枠の中に藍の姿を納める。

「絵を描かれるのですか？」

「描けはするけれど、ね。それなりの技術はあるつもりだけどうか

んせん、自分の絵が嫌いなの」

手を下ろし藍に向かって歩く。

前に立ち、腰に手を当て見下ろした。

藍は先程と同じように柱に身を預けたまま目を閉じていた。

「呼ばれたから来てやったわ」

「橙は？」

「神社の近くまで来たところで眠いと言って帰ったわ。褒美のマタタビをお忘れなく、だって」

「そうですか」

「それからこれ、途中で会った魔理沙からの贈り物」
再び藍は目を開く。

アリスに差し出された霊夢の生首のような何かを受け取った。
しばらくそれを眺め、アリスを見上げる。

「何ですか？これ」

「魔理沙は「あなたなら使い方が解る」って言ってたわ。お腹を押
してみて」

「…果たして生首に「お腹」があるのですか？」

「同じ疑問を抱いたけど栓無き事よ」

もう一度それを眺める。

考えても仕方がないので、言われた通り押してみた。

『ゆっくりしていつてね！！！！』

喋った。

「…あら、可愛い」

「…末期だわ」

アリスはかなり引いていた。

そんな彼女に藍は質問を重ねる。

「だけどこれ、随分と複雑に術式が織り込まれてますね」

「…意外ね。魔術が分かるの？」

「初歩の初歩ですけどね。術式の組み方自体は式神のそれに通じる部分があるからその応用、です。…もつとも」

柱から身を離し、身体を起こす。手の中にあるそれを興味深く見つめた。

「これは似通ってる、というより式神そのもの。術式の組み方は完全に式神の術式の理論と同じですね。魔理沙は何か言ってます？」

「…あー、言ってたわ。確か「異変を解決する者にとっては毒にも薬にもなる」って」

「成る程ね、考える事は一緒か。末恐ろしい奴だな、あいつも」

藍の言葉に疑問符を浮かべるアリス。

「それが今回の異変の役に立つの？」

「異変の解決には直接関係ない。だけど、解決までの通過点でかなり重要なキーとなる。緩やかな自殺を望む馬鹿者には他者の死を突き付ける」

歌うように語る彼女の言葉にはまるで言葉遊びのような響きがあった。

アリスはここに来るまでずっと抱いていた疑問を投げ掛ける。

「…いい加減聞かせて欲しいんだけど。私は何で呼ばれたのかしら？」

「異変が起きていることはもう知っているみたいですね。なら、異変の詳細を知っていますか？」

アリスの片眉がぴくりと動く。探るような視線を向けた。

「知ってるの？」

「知りたい？」

藍はにつこりと微笑んだ。

「情報と交換です。ちょっとした頼まれ事、受けてくれませんか？」

日が昇り、彼女の髪を照らし出す。

その神々しい姿には不釣り合いな、黒い笑みを浮かべる藍。

その笑みに、陸でもない気配を嗅ぎとったアリスは、静かに溜め息を吐いた。

午前4時52分

幻想郷の夜が明ける。

それが彼女　八雲　藍にとっての開戦の合図だった。

第7話 そして誰がいなくなるのか？（後書き）

こうして後書きを書くのは初めてですね。

というわけで初めまして、作者こと睦月です。

「東方異端」の「第7話 そして誰がいなくなるのか？」の読了、お疲れ様です。そしてここまで読んでいただきありがとうございます！

さて、今回は何故いつもは書かない後書きを書いたかというと…まあ、言い訳です（殴

前回の話からだいぶ間が空きましたが今回の話はとにかく難産でした。書いては消し書いては消し、一度は書き上げてそれをまた消したこともあります。

いやあ、文才のせいにしたくはありませんがとにかく自分の文章力・表現技法の幼稚さに頭を悩ませまして、今回やっとアップした話も読んでいてとても見苦しい文章だと思います（汗）

話の展開や独自解釈にもいろいろと突っ込みどころはありますが、それでもここまで読んでくれた読者様には感謝してもしきれません。本当にありがとうございます！

そして更新を待っていてくれた方、お待たせしました。ここまで間を空けてしまい申し訳ございません。

次回はもっと早く更新します！

本当にありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876o/>

東方異譚

2011年11月24日12時04分発行